



神経科学ニュース

Neuroscience News · Japan Neuroscience Society

〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目2-2 本郷ビル9F
日本神経科学学会

TEL: 03-3813-0272 FAX: 03-3813-0296
E-mail: office@jnss.org
<http://www.jnss.org>

Neuro2007

(第30回日本神経科学大会・第50回日本神経化学大会・
第17回日本神経回路学会大会 合同大会)のご案内

2007年の第30回日本神経科学大会(大会長:田中 啓治[理化学研究所脳科学総合研究センター])は、第50回日本神経化学大会(大会長:高坂 新一[国立精神・神経センター])、第17回日本神経回路学会(大会長:大森 龍司[玉川学園学術研究所])と合同で、2007年(平成19年)9月10日(月)から12日(水)までの3日間、パシフィコ横浜(神奈川県横浜市)で開催します。

只今、プレナリーレクチャー、企画・公募シンポジウム、Travel Awardなどの準備を進めております。

最新の情報や詳細は、随時、大会ホームページに掲示しますのでぜひご覧ください。

(<http://www2.convention.jp/neuro2007/>)

目 次

Neuro2007 (第30回日本神経科学大会・第50回日本神経化学大会・ 第17回日本神経回路学会大会 合同大会)のご案内	1
2008年以降の日本神経科学学会大会のご案内	2
第29回(2006)日本神経科学大会のご報告	3
第69回理事会議事録	4
平成18年度日本神経科学学会総会報告	15
Neuroscience Research (NSR)からのお知らせ	16
IBRO理事会報告議事録よりの抜粋	18
動物愛護管理法の改正にともなう新たな指針、基準の制定について	20
NGF2006に参加して～Rita Levi-Montalciniと128人の神経栄養因子の研究者～	23
シンポジウム・研究会のお知らせ	25
研究助成	27
公募	28
その他	30
編集後記	31

なお、大会までの主な予定は以下の通りです。

2006年9月末 企画シンポジウム決定

2006年10月10日 公募シンポジウム募集開始

2007年2月1日 一般演題募集開始・事前参加登録募集開始

2007年3月31日 一般演題登録締め切り

2007年9月10日～12日 Neuro2007

Neuro2007（第30回日本神経科学大会・第50回日本神経化学学会・第17回日本神経回路学会合同大会）への多数のご参加をお待ちしております。

また、積極的なシンポジウムの企画・提案をお願いいたします。

<プログラム概要>

1. 重点項目

- 1) 脳科学の広い分野を含める
- 2) アジアを含めた国際化に努める
- 3) 若手研究者を重視する
- 4) プレナリー講演、シンポジウム、ポスター発表に加えて一般口演を重視する

2. プレナリーレクチャー

・Prof. Earl K. Miller (MIT, Picower Institute/RIKEN-MIT Center)

・Prof. Michael E. Greenberg (Children's Hospital Boston, Harvard Medical School)

・日本神経化学学会50周年記念講演会（講演者は交集中）

3. 公募シンポジウム

2006年10月10日募集開始、2006年12月31日締切です。

募集概要は大会ホームページ

(<http://www2.convention.jp/neuro2007/>) に掲示しますのでご参照ください。

4. 一般口演およびポスターセッション

2007年2月1日募集開始、2007年3月31日締切です。

募集概要は大会ホームページ

(<http://www2.convention.jp/neuro2007/>) に掲示しますのでご参照ください。

なお、プログラムの決定時期は、2007年4月30日頃の予定です。

5. ランチョンセミナー

只今企画を募集中です。

6. 機器・書籍展示

只今出展企業を募集中です。

7. 市民公開講座

「高校生／大学生のための神経科学入門（仮）」を行います。

8. Travel Award

アジアからの若手研究者を対象とした Travel Awardを実施します。

9. 託児所

大会会場（パシフィコ横浜）内に託児室を特設する予定です。ぜひご利用ください。

お問い合わせは下記事務局までメールにてお知らせください。

日本コンベンションサービス株式会社

メディカルカンパニー

（担当 池田 ゆかり、吉富 広宣、山本 純）

〒100-0013

東京都千代田区霞ヶ関1-4-2

大同生命霞ヶ関ビル18階

TEL: 03-3508-1214 FAX: 03-3508-1302

E-mail: neuro2007@convention.jp

2008年以降の 日本神経科学学会大会のご案内

第31回（2008）日本神経科学学会大会

日時：2008年7月9日～7月11日

会場：東京国際フォーラム

（東京都千代田区丸の内3丁目5番1号）

第32回（2009）日本神経科学学会大会

日時：2009年7月23日～7月25日

会場：京都国際会議場

（京都市左京区宝ヶ池）

詳しくは学会HPをご覧ください。

第29回(2006) 日本神経科学大会のご報告

第29回日本神経科学大会大会長
京都府立医科大学医学研究科神経生理学

木村 實

標記大会は、2006年7月19日(水)、20日(木)、21日(金)の3日間、国立京都国際会館で開催され、3,000名を越える多数のご参加をいただき、無事終了いたしました。あいにく連日の雨天にもかかわらず、優れた講演、ポスター発表と活発な討論で大会を盛り上げてくださった参加者の皆様に感謝いたします。

発表演題数は、特別講演6題、受賞講演2題、シンポジウム・テクニカルセミナー・特別企画50企画・260題、一般口演137題、ポスター発表1,060題、ランチョンセミナー17題、合計1,482演題で、2005年横浜大会を200演題以上上回りました。参加者数は、事前登録者が2,193名、当日登録者が842(うち学部学生94名)で、非会員のシンポジスト等を含めると、参加者総数が3,035名という大変盛況な大会となりました。

今大会では、2005年横浜大会の方式を継承しつつ、いくつかの新しい試みも導入いたしました。これらの新しい試みを含めて2006年大会に関する参加者、学会理事会の皆様へのアンケートやご意見を基に評価・検討中です。まず第一に、大会のスローガンのひとつであった国際化の推進のために、シンポジウムの講演者には日本の研究者だけでなく外国在住の活発な研究者を加えていただくことをオーガナイザーの方に強く依頼申し上げました。大会として講演者招聘のための旅費をサポートする余裕がなく、オーガナイザーと講演者の方々に負担をお願いすることになってしまいましたが、結果的にシンポジウム・テクニカルセミナー48企画中30企画(63%)、250演題中52演題(21%)で外国在住の研究者に講演いただきました。このことがシンポジウムを新鮮、魅力的でレベルの高いものにすると共に、英語での講演とディスカッションを自然で活発にする上で大変貢献したと考えています。オーガナイザー、講演者の方々に改めてお礼申し上げます。第二に、トラベルアワードの充実を図り、アジアを中心とする活発

な若手研究者41名に授与しました。大会直前に5名のキャンセルがでるという残念な事態が生じてしまい、現在原因を検討中です。外国在住のシンポジストとトラベルアワードの受賞者がシンポジウム、一般口演やポスター発表、さらには会場のロビーで日本人会員と共に活発に討論することが例年以上に目立ち、国際化が実感されたという多くのコメントをいただきました。日本神経科学大会が高い水準を保ちつつ、アジアを中心として国際交流を更に発展させる方向に進んでいることは大変喜ばしいことであると思います。第三に、大会発表を英語化する試みとして、シンポジウムは英語で、一般口演は英語を推奨(日本語も可)し、演題登録の際に発表言語を報告していただきました。討論は日本語・英語どちらでも可能ですが、プログラム集の一般口演の各演題に発表言語を明記いたしました。結果的に137題中102題(74%)は英語での発表を希望され、残りの35題(26%)では日本語での発表希望で、英語での発表演題の割合が大会の予想を大きく上回ることになりました。しかし、アンケートに現れる参加者の意見は多様であり、日本語での発表を望む声も少なくありません。もう少し時間をかけて会員の皆様のご意見、学会理事会の方針を踏まえて検討する必要があります。第四に、大会プログラム・抄録CD-ROMに加えて大会ホームページ(HP)から利用者認証の上、ダウンロードできる演題検索システムを初めて導入いたしました。初めての試みであり、使い勝手の向上やMacOS9など過去のOSに対する対応などについてアンケートで意見をいただきましたが、有効性を評価する声が多かったように思います。ダウンロード版だけで良いのか、CD-ROMも必要であるのかについて来年の大会に向けて検討いただきたいと思います。第五に、学会広報委員会の柚崎通介先生にご協力いただいて、大会で発表されたすべての演題データを含む演題検索システムを学会のHPに格納し、会員が自分のパスワードを使ってダウンロードできるようにしました。従来はコンベンション会社のHPにしか残らなかった大会の情報を学会の資産として、すなわち会員のメリットとして総ての学会員が大会の情報をいつでも学会のHPを使って検索することができる体制の足がかりをつくりました。第六に、ポスター・機器展示会場(3,000 m²)は入り口側の約半分を機器展示スペースに、奥の半分をポスター発表スペースに充て、両側にコミュニケーションのためのテーブルと椅子、ドリンクコーナー、インターネットコーナー(有線、無線

LAN対応)を設けました。機器展示の配置、ブースの組み方などについては、2005年大会で得た協賛企業の方々の意見をできるだけ取り入れた結果、アンケートでは好評の声が多く寄せられる結果になりました。ランチョンセミナーと並んで大会開催の主要な協賛となる機器・書籍展示であり、今後更に展示企業の方々の希望を尊重して、できるだけ多くの協賛が得られるよう大会としての努力が必要であると思います。第七に、大会前日に市民公開講座「高校生のための神経科学入門」を開催しました。京都府立医科大学と京都大学を会場に、講演、研究室訪問と実験デモをおこない、150名の高校生と10名の高校教員の方々の参加を得ました。予め京都市内の高校にアナウンスし、企画立案段階から熱心な教員の方々や高校生のご協力を得て、予備講演会の実施や当日運営への協力をいただいた甲斐あって、大変熱気を感じさせるイベントとなりました。第八に、‘脳科学の研究費を考える’という特別企画が河田光博プログラム委員長と津本忠治会長によって開催され、学術振興会研究助成課岡本和久課長、鍋倉淳一前学術調査官、金澤一郎先生、廣川信隆先生などによる講演とディスカッションがおこなわれました。多数の参加者が、このテーマへの関心の高さを伺わせました。第九に、男女共同参画社会をめざす一環として2つの企画を実施しました。ひとつは従来の大会からの継承で大会会場内に託児室および親子休憩室を設け、3日間を通して延べ27名のお子様にご利用いただき、参加者からは大変好評をいただきました。従来の大会に比べると大変多くの方に利用いただきましたが、まだ決して利用は多いとはいえ、その低調さには根の深い問題が含まれていると考えざるを得ません。第二の企画として“神経科学における男女共同参画はどうあるべきか”という優れたシンポジウムを平田たつみ先生、小田洋一先生に実施いただきましたが、残念ながら参加者がごく少数でした。この問題について会員の皆様のご意見を是非お寄せいただいて、学会大会としての方針を検討いただきたいと思います。第十に、参加費の支払い方法を2005年大会に引き続いて郵便振替、クレジットカード決済、コンビニ決済で受け付けました。2005年大会からスタートした利便性の高いこの方法が定着していくことを予感させますが、大会運営コストの上昇(決済手数料などで約130万円)と引き換えに成り立っています。第十一に、大会参加費を2005年大会に比べて一般会員の事前登録で1,000円値上げして13,000円にさせていた

できました。参加者アンケートに‘参加費が高い’という声があることは承知しておりますが、大会予算の中、参加費収入で賄われるのは全体の約40%ほどであり、大半は企業・財団からの協賛、寄付を集める大会の努力によって支えられています。大会の財務基盤、予算規模、そして参加費をどのように考えるべきかは会員の皆様と学会理事会で是非お考えいただきたい重要な問題です。

今年の大会の運営につきましては大会執行委員会、実行委員会と大会事務局そして学会事務局が準備を重ねて努力いたしましたが、配慮の足りない点もあったことと思います。来年以降の大会を更に充実させるために、私が掲げた上記の点を含めて、お気づきになった点をご遠慮なく学会事務局(office@jnss.org)へお寄せ下さい。

最後に、大会に参加いただいた皆様、組織委員会、プログラム委員会、執行委員会、大会・学会事務局の方々、本大会の運営をご支援くださいました諸団体、財団、企業の皆様に、この場を借りて、心からお礼を申し上げます。

第69回理事会議事録

日時:2006年7月18日(火) 15:30-20:30

場所:国立京都国際会館 2F Room I

出席:津本忠治会長、宮下保司庶務理事、森憲作会計理事、狩野方伸広報担当事務、伊佐正、入来篤史、岡野栄之、金子武嗣、加藤進昌、木村實、小泉英明、祖父江元、田中啓治、西川徹、貫名信行、藤田一郎、八木健各理事

欠席:大隅典子、大森治紀、岡本仁、小澤澪司、小野武年、川人光男、桐野高明、高橋智幸、真鍋俊也各理事

報告

1. 庶務報告: 宮下庶務理事より2006年7月6日時点での会員構成の状況が報告された。会員数は、会費未納会員の退会手続きを進めた結果、正会員は横ばいであり、学生会員は増加し、全体として微増であることが報告された。会員数の増加をはかる方策が必要であるとの提案がなされた(資料1、資料2参照)。

2. 会計報告: 森会計理事より2006年1月1日～6月30日までの中間会計報告がなされた(資料3参照)。現在、会費納入率は、正会員数の60%、学生会員数の69%であり、納入率を上げる方策をさらに検討すべきとの提案がなされた。

3. 委員会報告:

1) 執行委員会報告: 5月14日に開催された拡大執行委員会について津本会長より報告があった(内容は、神経科学ニュース2006年NO4に掲載)

2) 広報委員会報告: 狩野理事より、神経科学ニュースの発行状況及びホームページの現状について報告があった。

3) 対外広報小委員会報告: 入来理事より今年のプレスリリースの報告があり、プレス側からの取材申込が少ないので今後は、プレス個々にも連絡をとり、大会内容をさらにメディアに浸透させることが望ましいとの報告があった。

4) 動物実験・倫理委員会: 伊佐理事より動物実験委員会について動物愛護管理法の改正に伴い、環境省から「実験動物の飼養及び保管並びに苦痛の軽減に関する基準」が、さらに文部科学省から「研究機関等における動物実験等の実施に関する基本指針」が、そして学術会議から「動物実験の適正な実施に向けたガイドライン」が告示され6月1日より適用されたことが報告された。またケタミンが麻薬指定されるにともない、使用にあたっては、麻薬研究者への登録が必要となることが報告された。

5) 将来計画委員会: 金子理事よりTravel Awardを、公平性をもったの選考するための具体案、英語化の強化、託児室の完備および、Neuroscience Researchを、Journal of Neuroscienceクラスにする方策などを議題として、大会会期中に委員会を開催する予定であることが報告された。

6) 第29回大会準備報告: 木村理事(第29回大会大会長)より、演題登録数、事前登録数等の演題数は、昨年を上回ること、及びTravel Awardは、71件の申込があり、その中から41件を受賞候補として決定した事等が報告された。(詳細は、本紙のトップ記事第29回(2006)日本神経科学大会のご報告を参照)。その他、筆頭発表者の会費滞納に関しては対策を強化し、来年度は、自動振込み手続きについての周知徹底が重要であることや、Travel Award申し込み者の推薦者の見直しなどが今後の課題であるとの報告があった。

7) 第30回大会準備報告: 田中理事(第30回大会大会長)より、一般口演を重視する方向である

こと、中高生神経科学入門講座を8月に開催する案があること、Travel Award は、採択数50人を目指し、日本神経科学学会会計海外若手招聘基金積立金にも期待していること、託児室は会場内に設置し、プレスリリースの強化、展示は100を目指す方針であること、などが報告された。また、大会事務局を学会側に移す案の検討も必要であることが指摘された。

8) 第31回大会準備報告: 岡野理事(第31回大会大会長)より2008年7月9日から7月11日まで、東京国際フォーラムで開催する予定であること及び、その準備状況について報告があった。

9) 第32回大会準備報告: 伊佐理事(第32回大会大会長)より2009年7月23日から7月25日まで、京都国際会議場において、26日より開催される国際生理学会に連結する形で開催する意向、および、準備状況について報告があった。

10) 日本神経科学学会法人化検討委員会: 藤田理事より、本年改正された公益法人制度関連法案の説明と現状の分析がなされ、現段階では、本学会を法人化することのメリット・デメリットが不明確であり、さらに検討を続ける必要があるとの報告があった。

4. Neuroscience Research 編集報告: 津本編集主幹より、投稿数が年間400篇近くに増え順調に編集出版がなされていること、会計面では、日本学術振興会からの科学研究費学術定期刊行物補助金が、昨年度を上回る予定であること、及び理事会直前に開催された選考委員会にて、3篇の優秀論文賞候補論文を選出したことが報告された。今後の予定としては、NSRに受理された論文でFirst Author 及びCorresponding Authorが日本神経科学学会会員の場合は、Receiving Editor と Editor-in-Chief が了承すれば、全てのカラー図は無料化する方針であること、さらに9月1日から、編集委員会が新体制となることなどが報告された。

5. IBRO 関係: 狩野理事より、津本会長の代理で出席した7月8日開催のIBRO 理事会の様子について報告があった(本紙記事参照)。IBROは190団体の集合体で、日本神経科学学会は2番目に大きく、IBROとの関係についての議論の必要性が指摘された。

審議事項

1. NSR 優秀論文賞選考委員会で選出した 2005 年 NSR 優秀論文賞候補論文 3 篇について津本選考委員会委員長より報告があり、審議の結果承認された(3 篇については総会報告参照)。

2. Travel Award 申請書の推薦者の資格について、現在のもの(日本神経科学学会正会員、IBRO および FAONS 加盟学会の代表者)に加えて申請者の研究機関の代表者も有効とする案が提案され、審議の結果承認された。

3. 外国人会員について年次大会に筆頭発表者として参加するとの申し出により入会金を免除し、更に入会年度を含めて 3 年間は会費を免除するという案を審議の結果承認した。

4. WEB 上の会員情報の開示項目は現状どおりとすること、及び外部から特定の個人が会員であるか非会員であるかの問い合わせがあった場合、当面、返答しないこととした。

5. 会費滞納会員に対する対応について。
大会筆頭発表者が前年の年会費を支払ってない場合は発表できないことを徹底すること、また、新会員の推薦者になる場合も、前年度の年会費の支払いを完了することを徹底すること、が承認された。2 年以上年会費の支払いのない会員は、自動的に退会処理をする案も審議の結果承認された。留学等で一定期間外国滞在になる会員等のための休会制度について議論され今後検討することとなった。

6. 上記 3 の外国人会員の会費に関する会則の附則及びパネルにその他神経科学を加えるという附則改定案について審議し、同案を総会に提出することとした。(資料 4 参照)

7. 学会の倫理規定の検討等、倫理問題の検討が必要となっているので、従来の研究体制委員会を、研究倫理委員会に名称変更して、倫理問題を検討していただくことになった。

8. 各種の賞への候補者の推薦は、指名委員会にておこなう案が検討され、承認された。

9. 時実利彦記念賞の規定について審議され、改訂案が承認された。

10. 年次大会のホームページは、大会側で管理し、大会登録は、学会業者からは独立させて、学会独自のサイトを用意する方向で検討する案が承認された。

11. 神経科学ニュースの英語化について議論され、ニュース編集委員会で検討することとなった。また神経科学ニュースに掲載するお知らせ(研究助成・公募などを含む)に関して新規定案が承認された。(新規定は、本紙 30 ページに掲載)

資料1

日本神経科学学会会員構成

(2006年7月6日)

	正会員	学生会員
1 分子・細胞神経科学	1891 (76)	335 (141)
2 システム神経科学	1442 (55)	278 (96)
3 臨床・病態神経科学	473 (22)	46 (22)
4 パネル不明	77 (5)	20 (13)
合計	3883 (158)	679 (272)
外国人会員	52 (27)	
賛助会員 (1)	2	
賛助会員 (2)	13	
名誉会員 (名誉会長を含む)	14	
全会員数	4,643	
平成16年度以降会費納入会員数	4,403	
()内は新会員		
退会 正会員88名 学生会員5名		
賛助会員 (2) 1件		
期限切れ会員 20名		
復活 正会員4名		
異動 正会員→学生会員 20名		
異動 学生会員→正会員 1名		

資料2

新会員リスト

正会員

パネル1、分子・細胞神経科学 76名

明石 馨 新潟大学脳研究所
 赤間 邦子 千葉大学大学院自然科学研究科
 安達 良太 岩手大学工学部
 荒井 路子 沖縄科学技術基盤整備機構 大学院大学先行的研究プロジェクト
 新崎 智子 沖縄科学技術基盤整備機構 大学院大学先行的研究プロジェクト
 有村 奈利子 名古屋大学 大学院医学系研究科
 飯島 崇利 慶應義塾大学 医学部
 飯野 正光 東京大学大学院医学系研究科
 石井 功 群馬大学大学院医学系研究科
 石井 万幾 東京都神経科学総合研究所
 分子発生生物学
 石井 陽子 富山大学医学部
 石田 雄介 名古屋市立大学医学部
 糸瀬 稔 京都府立医科大学大学院医学研究科
 稲木 美紀子 東京大学大学院理学系研究科
 井上 貴史 理化学研究所 脳科学総合研究センター
 岩井 陽一 理化学研究所 脳科学総合研究センター
 岩倉 百合子 Skirball Inst. of Biomolecular Med., NYU Medical Center
 上野 将紀 理化学研究所 脳科学総合研究センター
 上野山 賀久 名古屋大学大学院生命農学研究科
 扇野 寛史 京都大学大学院医学研究科
 大迫 清子 京都大学大学院医学研究科
 先端領域融合医学研究機構
 大多 茂樹 慶應義塾大学 医学部
 貝塚 拓 三菱化学生命科学研究所 脳梗塞研究グループ
 柏木 香保里 神戸大学バイオシグナル研究センター
 葛西 秀俊 神戸大学大学院医学系研究科
 上家 潤一 東北大学大学院薬学研究科
 河崎 洋志 東京大学大学院医学系研究科
 川辺 浩志 Max-Planck-Institute for Experimental Medicine
 Department of Molecular

Neurobiology
 熊本大学 発生医学研究センター
 Dept.of Neurosciences,University of California,San Diego
 慶應義塾大学 医学部
 三菱化学生命科学研究所 脳梗塞研究グループ
 理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター
 慶應義塾大学 医学部解剖学教室
 岡崎統合バイオサイエンスセンター 神経分化研究室
 Molecular Neurobiology,The Salk Institute
 兵庫大学
 摂南大学薬学部薬理学研究室
 大阪大学大学院生命機能研究科
 国立環境研究所 環境リスク研究センター
 東京医科歯科大学 難治疾患研究所
 大阪大学大学院医学系研究科
 京都大学大学院医学研究科
 先端領域融合医学研究機構
 新潟大学大学院医歯学総合研究科
 自然科学研究機構・生理学研究所
 分子生理研究系
 福山大学薬学部応用薬理学研究室
 名古屋大学 理学部
 大阪府立大学 理学系研究科
 理化学研究所 脳総合研究センター
 札幌医科大学 保健医療学部
 産業医科大学 医学部第1生理学
 金沢大学医学系研究科
 発達障害研究所 発生障害学部
 The Scripps Research Institute
 三菱化学生命科学研究所 分子加齢医学研究グループ
 Department of Physiology, University of California San Francisco (UCSF)
 慶應義塾大学 医学部
 関西医科大学 解剖学第一講座
 東京都神経科学総合研究所
 基盤技術部門

桑 和彦
 古泉 博之
 小見山 貴継
 齋藤 憲
 櫻井 大雄
 佐々木 慎二
 佐々木 真理
 佐原 節子
 新郷 明子
 杉山 千絵
 菅生 紀之
 鈴木 純子
 武内 章英
 種子田 艶
 遠山 桂子
 野住 素広
 等 誠司
 平居 貴生
 平田 普三
 廣田 順二
 黄 錦鴻
 藤井 博匡
 藤原 広明
 堀 修
 正木 茂夫
 松尾 直毅
 松本 峰男
 武藤 彩
 本橋 淳子
 森 徹自
 守屋 敬子

森山 隆太郎	近畿大学 理工学部	岩野 正晃	東京大学 分子細胞生物学研究所
安田 徹	順天堂大学医学部 老人性疾患 病態治療研究センター	内田 真理子	日立製作所 基礎研究所
横幕 大作	新潟大学脳研究所分子神経生物学	緒形 雅則	北里大学医療衛生学部
吉田 隆行	大阪大学大学院医学系研究科	小川 昭利	理化学研究所 脳科学総合研究セ ンター
米山 雅紀	摂南大学薬学部薬理学研究室	越久 仁敬	兵庫医科大学 生理学第一講座
李 元元	千葉県がんセンター 研究局生化学 研究部	小野 誠司	Yerkes National Primate Research Center, Emory Univ. Sensory-Motor Systems
劉 天玲	千葉県がんセンター 研究局生化学 研究部	加藤 元一郎	慶應義塾大学 医学部
若林 毅俊	関西医科大学 解剖学第一講座	門田 宏	国立身体障害者リハビリテーショ ンセンター研究所 感覚機能系 障害研究部
Joanna Doumanis	理化学研究所 脳科学総合研 究センター	金 完哉	岐阜大学大学院医学研究科
Sabit Hemragul	富山大学 医学部	久保田 繁	山形大学工学部
IL-SUNGJANG	Kyungpook National University, School of Dentistry Dept. of Pharmacology	国府 裕子	産業技術総合研究所
Insen Song	理化学研究所 脳科学総合研究セ ンター	小山 慎一	昭和大学医学部神経内科
Yasuda Ryohei	Dept. of Neurobiology, Duke University Medical Center	西條 直樹	NTT コミュニケーション科学基礎 研究所 人間情報研究部
Schenck Stephan	東京医科歯科大学 大学院医 歯学総合研究科COE	櫻井 映子	東北大学大学院医学系研究科
Adrian Moore	理化学研究所 脳科学総合研 究センター	左達 秀敏	花王株式会社 東京研究所
Klaus Heese	School of Biological Sciences, Nanyang Technological University	篠崎 隆志	理化学研究所 脳信号処理研究チーム
Gilyana Borlikova	沖縄科学技術基盤整備機構 大学院大学先行研究プロジェクト	柴田 克成	大分大学工学部
		島田 明佳	NTT 物性科学基礎研究所
		杉田 陽一	産業技術総合研究所 脳神経情報 研究部門
		高柳 友紀	自治医科大学 生理学神経脳生理
		橘 篤導	神奈川歯科大学 生態機能学講座 生理学分野
		舘 俊太	大阪大学大学院生命機能研究科
		露口 尚弘	大阪市立大学 大学院医学研究科
		土井 泰次郎	大阪大学 大学院生命機能研究科
		時本 楠緒子	理化学研究所 脳科学総合研究セ ンター
		豊村 暁	北海道大学 電子科学研究所
		永嶋 義直	花王株式会社 ヘルスケア第2研 究所
		中谷 裕教	理化学研究所 脳科学総合研究セ ンター 認知動力学研究チーム
		中野 秀子	九州共立大学 工学部
		根本 正史	東京都精神医学総合研究所
		林 勇一郎	京都大学医学研究科
		藤尾 智紀	松下産業衛生科学センター 労働保健部
		船曳 和雄	京都大学医学研究科 先端領域融

パネル2、システム神経科学 55名

赤尾 鉄平	北海道大学 大学院医学研究科
芦田 剛	京都大学大学院医学研究科
麻生 俊彦	京都大学大学院医学研究科
安部 公輔	京都大学大学院情報学研究科
安部川 直稔	NTT コミュニケーション科学基礎 研究所 人間情報研究部
天野 薫	NTT コミュニケーション科学基礎 研究所
井沢 優美	東京女子医科大学第一生理学教室
井上 勝也	藍野大学
岩野 孝之	産業技術総合研究所 脳神経情報 研究部門

		合医学研究機構	溝部 恵子	京都第二赤十字病院 眼科
増田 早哉子		国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所 感覚機能系障害研究部	緑川 晶	中央大学 文学部
			矢澤 生	国立長寿医療センター研究所 研究資源有効利用室
松坂 義哉		東北大学大学院医学系研究科	吉田 義弘	鹿児島大学 医学部保健学科
間宮 隆吉		名城大学薬学部	米田 貢	金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻
丸山 雅紀		理化学研究所 脳科学総合研究センター	渡辺 英寿	自治医科大学 脳外科
宮崎 真		早稲田大学 人間科学学術院	Lisa Cook	Phenomenome Discoveries Inc.
武藤 弘樹		理化学研究所脳科学総合研究センター 神経回路ダイナミクス研究チーム		
武藤 牧子		東京大学大学院総合文化研究科	パネル不明 5 名	
山口 賀章		The Salk Institute Systems Neurobiology Lab.	曾我 朋子	国立精神神経センター神経研究所
山下 祐一		理化学研究所 脳科学総合研究センター	杉生 真一	大阪大学大学院歯学研究科
			丸山 千秋	東京都神経科学総合研究所 分子神経生理
Thuy Ha Duy Dinh		京都大学大学院医学研究科	山本 亮	京都大学医学研究科
Andreas A. Ioannides		理化学研究所 脳科学総合研究センター	朴 日淑	国立循環器病センター研究所 放射線学部
Todd Pataky		ATR 脳情報研究所		
Vahe Poghosyan		理化学研究所 脳科学総合研究センター	学生会員	
			パネル 1、分子・細胞神経科学	141 名
パネル 3、臨床・病態神経科学		22 名	青木 誠	理化学研究所 脳科学総合研究センター
秋山 治彦		東京都精神医学総合研究所	朝倉 太郎	横浜市立大学 大学院医学研究科
白井 桂子		京都大学医学研究科附属高次脳機能総合研究センター	網代 将彦	東北大学加齢医学研究所 分子発生研究分野
押野 悟		大阪大学 医学部	畦地 裕統	新潟大学脳研究所 細胞神経生物学分野
小幡 文弥		北里大学医療衛生学部	安達 一英	慶應義塾大学 医学部
河村 満		昭和大学医学部神経内科	阿蒜 洋一	東北大学大学院情報科学研究科
古賀 秀剛		佐賀大学医学部	荒井 淳一	京都工芸繊維大学 大学院工芸科学研究科
笹栗 健一		神奈川歯科大学成長発達歯科学講座	安藤 徹也	筑波大学大学院生命環境科学研究科
田中 優子		九州大学大学院	安藤 舞	筑波大学生命環境科学研究科
戚 美玲		東京医科歯科大学難治疾患研究所	井口 恵里子	京都大学医学部
林 拓也		国立循環器病センター研究所 放射線医学部	池谷 真澄	横浜市立大学 医学部
船曳 康子		京都大学医学部附属病院	石井 裕	生理学研究所 神経機能素子
堀内 正久		鹿児島大学 大学院医歯学総合研究科	石田 久美子	名古屋大学 大学院医学系研究科
松田 芳樹		創価大学工学部	石橋 紀世	筑波大学大学院 人間総合科学研究科
三浦 義治		京都大学ウイルス研究所	石原 奈津実	東京大学大学院医学系研究科
水野 敏樹		京都府医科大学大学院 神経病態制御学	市川 直哉	名古屋大学大学院生命農学研究科
			市田 宗大	奈良先端科学技術大学院大学

	イオサイエンス研究科	櫻井 勝康	東北大学大学院医学系研究科 創生
伊藤 由梨	京都大学 大学院生命科学研究科		応用医学研究センター
猪野 彩子	筑波大学大学院生命環境科学研究科	佐藤 健一郎	東邦大学 大学院医学研究科
	科	佐藤 大仁	群馬大学大学院 医学系研究科
武 玉梅	岡山大学医歯薬総合研究科	澤田 洋介	京都大学大学院 情報学研究科
上田 美野里	東京薬科大学 生命科学部		知能情報学専攻
上野 由希子	大阪大学大学院生命機能研究科	柴田 美雅	産業医科大学 医学部
江頭 良明	大阪大学大学院生命機能研究科	柴田 実	京都大学大学院医学研究科
大澤 康雄	東京農業大学大学院 応用生物科学部	清水 尚子	大阪大学大学院医学系研究科
		清水 祐紀	東京薬科大学 生命科学部
大島 拓	千葉大学大学院医学研究院	下 拓三	東京農業大学大学院 農学研究科
大城 博矩	東京大学大学院総合文化研究科	徐 玉霞	名古屋大学 大学院医学系研究科
大谷 若菜	大阪大学大学院医学系研究科	白井 克幸	群馬大学大学院医学系研究科
奥田 洋明	大阪大学大学院医学系研究科	杉山 友香	東北大学大学院医学系研究科
小坂田 文隆	京都大学大学院薬学研究科	鈴木 雄策	筑波大学人間総合科学研究科
小原 武久	東京大学大学院人文社会系研究科	壽美田 一貴	東京医科歯科大学 医学部
折田 将成	摂南大学薬学部薬理研究室	関 優子	京都大学大学院理学研究科
片桐 友二	理化学研究所 B S I 運動学習制御	世古 敬一	摂南大学薬学部
金丸 千沙子	筑波大学第二学群生物学類	戴 小牛	名古屋大学 大学院医学系研究科
鎌田 暁史	東北大学大学院 薬学研究科薬理学分野	武田 紗路	東北大学 大学院情報科学研究科
		龍野 良佑	千葉大学 大学院自然科学研究科
亀田 浩司	京都大学大学院医学研究科		赤間研
川崎 展	産業医科大学 第1生理学	田中 裕一	東京大学 大学院新領域創成科学研究科
川田 浩一	摂南大学薬学部		
川端 いづみ	東京医科歯科大学医歯学総合研究科	棚平 千代子	熊本大学大学院 医学薬学研究部
		谷口 順子	千葉大学大学院 医学研究院神経生物学
上田 壮志	東京大学大学院医学系研究科		
木口 倫一	和歌山県立医科大学 薬理学教室	田村 誠	東京大学大学院薬学系研究科
北川 雄一	京都大学理学研究科生物物理学教室	張 悦	東京農業大学 応用生物科学部
		津金 麻実子	国立精神神経センター・神経研究所 遺伝子工学
金 泰善	名古屋市立大学大学院医学研究科	出来本 秀行	神戸大学大学院医学系研究科
木村 郁夫	千葉科学大学 薬学科 応用薬理	出山 諭司	北海道大学大学院 薬学研究科
木村 健治	九州工業大学 大学院生命体工学研究科	所 崇	富山大学医学部
		中尾 賢治	京都大学大学院薬学研究科
木村 俊哉	大阪大学大学院生命機能研究科	中島 昭憲	富山大学大学院 医学系研究科
久加 亜由美	京都工芸繊維大学	長嶋 玲子	摂南大学薬学部
黒岩 真帆美	久留米大学 医学部	中村 創一郎	筑波大学大学院 人間総合科学研究科
後藤 淳	京都大学大学院生命科学研究科		
後藤 由佳	摂南大学薬学部薬理研究室	中村 美智子	東京大学医科学研究所 基礎医科学部門
駒井 太陽	新潟大学脳研究所 細胞神経生物学分野		
今 実知恵	東北大学工学部情報工学科	中森 智啓	東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科
近藤 邦生	京都大学大学院生命科学研究科	夏目 正輝	筑波大学大学院 人間総合科学研究科
齊藤 憲史	総合研究大学院大学 先端科学研究科		
齋藤 健	産業医科大学 医学部第1生理学	西田 倫希	京都工芸繊維大学 繊維学部応用生物学科
坂岡 篤	京都大学大学院 情報学研究科 知能情報学専攻	西田 秀子	東京医科歯科大学 医歯学総合

西巻 拓也	研究科 自然科学研究機構生理学研究所 発達生理学研究系	山本 寛	京都大学大学院理学研究科生物科学専攻
野村 洋	東京大学大学院薬学系研究科	梁 賢正	三菱化学生命科学研究所 瀬藤グループ
橋本 隆	京都工芸繊維大学 繊維学部	吉村 健太郎	大阪大学大学院 医学系研究科
橋本 弘史	産業医科大学 第1生理学	劉 印明	順天堂大学 医学部
長谷川 俊介	東京農業大学 バイオサイエンス学科	柳 涛	佐賀大学医学部 生体構造機能学講座
秦 朋彦	東京医科歯科大学 大学院保健衛生学研究科	和座 雅浩	名古屋大学大学院医学系研究科
畠中 謙	東京大学薬学部	渡辺 啓介	自然科学研究機構 生理学研究所 分子神経生理部門
早川 英規	順天堂大学 大学院医学研究科	渡邊 信次郎	富山大学薬学部
原 直子	東京大学大学院薬学系研究科	渡辺 則之	岩手医科大学 医学部
引間 卓弥	東北大学大学院 生命科学研究科	渡邊 博康	東京大学大学院医学系研究科
樋口 桂	摂南大学薬学部薬理研究室	渡辺 光代	創価大学大学院工学研究科
髭 俊秀	京都大学大学院理学研究科	Shahidul Islam	熊本大学大学院医学薬学研究部
福井 康幸	京都大学大学院医学研究科 先端領域融合医学研究機構		
藤島 和人	理化学研究所 脳科学総合研究センター		
藤本 真二	京都大学大学院薬学研究科	パネル2、システム神経科学 96名	
Pheng Vutha	名古屋大学大学院生命農学研究科	朝田 雄介	大阪大学大学院生命機能研究科
本蔵 直樹	東京大学大学院 医学系研究科	阿部 恵子	九州大学大学院医学研究院
前田 秀一	創価大学大学院 工学研究科	阿部 央	理化学研究所脳科学総合研究センター 認知機能表現研究チーム
松下 博昭	岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科	阿部 十也	京都大学大学院医学研究科
松田 和樹	東北大学大学院情報科学研究科	天野 大樹	国立精神・神経センター神経研究所 疾病研究第四部
間宮 則	東京農業大学 応用生物科学部	綾部 友亮	慶應義塾大学 大学院社会研究科
水谷 治央	東京大学大学院医学系研究科	石井 俊行	東邦大学大学院理学研究科 生物分子科学科
三角 吉代	名古屋市立大学大学院医学研究科	石川 直樹	京都大学霊長類研究所 行動発現分野
宮崎 隆明	東京大学分子細胞生物学的研究所	石橋 和也	東京大学大学院新領域創成科学研究科
宮下 智大	千葉大学大学院医学研究院	尹 成珠	日本医科大学 第一生理
村上 智史	東京大学分子細胞生物学的研究所	歌 大介	九州大学大学院 医学研究院
村田 航志	東京大学医学系研究科	内田 雄介	順天堂大学 医学部
村野 光和	日本医科大学 薬理学	内田 信也	東北大学加齢医学研究所
村松 里衣子	東京大学大学院薬学系研究科	閻 新萍	山形大学工学部
米良 貴嗣	産業医科大学 医学部	大谷 誠	九州工業大学大学院 生命体工学研究科
森 達也	奈良先端科学技術大学院大学 バイオサイエンス研究科	大前 彰吾	順天堂大学 大学院
諸田 沙織	東京薬科大学 生命科学研究科	大桃 秀樹	筑波大学大学院 人間総合科学研究科
安井 典久	大阪大学蛋白質研究所	岡崎 由香	九州工業大学
山内 陽介	京都大学大学院薬学研究科	奥野 友香	お茶の水女子大学 大学院人間
山 順也	京都大学大学院生命科学研究科		
山下 智弘	京都大学大学院 情報学研究科 知能情報学専攻		
山田 千晶	東京慈恵会医科大学 総合医科学研究センター		

	文化研究科	丹原 香菜子	ノートルダム清心女子大学 人間生活学研究科
尾崎 弘展	大阪大学医学系研究科	常 征	大阪大学大学院歯学研究科
小沢 貴明	筑波大学大学院人間総合科学研究科	塚野 浩明	新潟大学脳研究所 システム脳生理学分野
小野 敬治	京都大学霊長類研究所行動発現分野	津田 夢芽子	筑波大学大学院 人間総合科学研究科
小野 健一	千葉大学大学院 医学研究院	名内 存人	東京大学大学院総合文化研究科 広域科学専攻 関連基礎科学系
小野 方子	九州工業大学 大学院生命体工学研究科	中島 敏	東北大学大学院医学研究科
檜八重 泰斗	東海大学大学院開発工学研究科	中野 雅文	九州工業大学 大学院生命体工学研究科
加藤 康広	東京大学大学院工学系研究科	並木 重宏	筑波大学大学院
加藤 陽子	独立行政法人 理化学研究所 脳科学総合研究センター	成瀬 康	東京大学大学院新領域創成科学研究科
金 主賢	富山大学理工学研究科電気電子システム工学	南部 功夫	奈良先端科学技術大学院大学 情報科学研究科
國松 淳	北海道大学 大学院医学研究科	西村 一路	日本医科大学 第一生理
久保 貴嗣	東北大学大学院情報科学研究科	西村 方孝	大阪大院大学院工学研究科
小竹 康代	大阪大学大学院生命機能研究科	西村 正彦	琉球大学大学院医学研究科
小林 祐希	富山大学理学部	新田 卓也	北海道大学 大学院医学研究科
駒形 成司	新潟大学脳研究所システム脳生理学分野	二宮 太平	大阪大学大学院生命機能研究科
佐々木 耕太	大阪大学大学院基礎工学研究科	野村 康隆	東海大学大学院開発工学研究科
佐々木 拓哉	東京大学大学院薬学系研究科	橋本 敬輔	星薬科大学 薬品毒性学教室
佐藤 千尋	東北大学大学院生命科学研究科	早川 隆	京都大学大学院医学研究科
塩崎 博史	大阪大学大学院生命機能研究科	原 康治郎	京都大学大学院文学研究科
重宗 弥生	東北大学大学院医学系研究科	平井 大地	京都大学霊長類研究所 行動発現分野
志水 智一	九州工業大学 大学院生命体工学研究科	福島 愛	東北大学未来科学共同技術センター
菅原 隆紀	横浜市立大学大学院総合理学研究科	牧野 光志	九州工業大学 大学院生命体工学研究科
杉本 博史	東京電機大学大学院 先端科学技術研究科 電気電子システム工学専攻	松浦 清人	京都大学医学研究科
鈴木 敦命	東京大学大学院 総合文化研究科	松田 京子	北海道大学大学院 医学研究科
鈴木 郁郎	東京大学大学院総合文化研究科	水落 智美	東京大学大学院医学系研究科
鈴木 聡子	東京都立大学 大学院理学研究科	三宅 真次郎	神奈川歯科大学成長発達歯科学講座
鈴木 啓之	東海大学連合大学院生物科学研究科	宮武 祐士	大阪電気通信大学 医療福祉工学部 医療福祉工学科
関口 敦	東北大学未来科学技術共同研究センター	三好 隆文	福井大学大学院 工学研究科
高橋 和志	九州工業大学 大学院生命体工学研究科	森 理也	大阪大学大学院生命機能研究科
高宮 千枝子	富山大学大学院医学系研究科	森島 真幸	大分大学医学部循環病態制御講座
高良 沙幸	生理学研究所 生体システム	森島 佑	鳥取大学大学院医学系研究科
田中 琢真	京都大学大学院医学研究科	山下 和香代	鹿児島大学 理工学研究科
田中 康代	京都大学大学院医学研究科	山田 麻記子	久留米大学 医学部
田淵 有香	大阪大学大学院生命機能研究科	山村 裕美	筑波大学人間総合科学研究科
		山本 輝	同志社大学 大学院工学研究科
		吉田 三穂	鳥取大学大学院医学系研究科

吉武 講平	新潟大学 脳研究所	パネル不明 13 名
涌澤 圭介	東北大学未来科学共同技術センター	
渡部 喬光	東京大学医学部	
渡邊 健児	新潟大学脳研究所 システム脳生理学分野	
渡邊 英博	東北大学大学院 生命科学研究科	岩田 衣世 名古屋大学大学院生命農学研究科 小野 麻衣子 お茶の水女子大学人間文化研究科 工藤 紀子 独立行政法人 理化学研究所 脳科学総合研究センター 佐々木 亮 順天堂大学 医学部 高瀬 健志 名古屋大学大学院生命農学研究科 田原 佳美 奈良女子大学 大学院人間文化研究科
万 小紅	理化学研究所 脳科学研究センター	
Penphimon Phongphanphanee	生理学研究所 発達生理学研究系	
Ho Anh Son	富山大学医学系研究科	
パネル 3、臨床・病態神経科学 22 名		羽場 芙弥 東北大学大学院医学系研究科附属 創生応用医学研究センター 三浦 真理子 筑波大学大学院人間総合科学研究科 鴻池 菜保 京都大学霊長類研究所 行動神経研究部門 志々田 一宏 広島大学 大学院医歯薬学総合研究科 平杉 嘉平太 京都府立医科大学大学院医学研究科 大崎 雅央 東京大学医学系研究科 堀内 大輔 東京医科歯科大学難治疾患研究所
石井 宣一	東京医科歯科大学 難治疾患研究所	
門田 領	千葉大学大学院 医学薬学府 先進医療科学専攻	
北澤 裕美	東京医科大学 病理学講座	
木下 亜紀子	広島大学大学院医歯薬学総合研究科	
佐藤 義朗	名古屋大学大学院 医学研究科 健康社会医学系	
鈴木 一詩	東京大学大学院医学系研究科	
曹 旭晴	順天堂大学 医学部脳神経内科	
谷 直樹	大阪大学医学部	
玉井 秀明	自治医科大学 大学院医学研究科	
豊巻 敦人	北海道大学 大学院医学研究科	
中谷 善彦	昭和薬科大学	
中村 恵子	京都府立医科大学 大学院医学研究科	
野田 満	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科	
福田 朋樹	岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科	
松岡 信広	防衛医科大学校 麻酔学講座	
松田 史代	鹿児島大学大学院 医学部保健学研究科	
松本 洋明	愛媛大学 医学部	
萬納寺 誓人	千葉大学大学院 医学薬学府	
山口 達之	京都府立医科大学 附属脳・血管系老化研究センター	
和田 洋一	東京医科歯科大学難治疾患研究所	
綿貫 俊夫	山口大学医学部高次神経科学講座	
Niyaz Madinyet	東京医科大学 病理学	

2006年度日本神経科学学会会計				資料3
(2006年1月1日～2006年6月30日)				
	予算	中間決算	備考	
収入	前年度繰越金	12,733,812	12,733,812	
	会員入会金	1,050,000	1,179,000	2006年度入会数7月現在506人
	正会員年会費	31,270,000	23,295,000	2006年7月6日現在正会員数3903会費納入率60%
	学生会員年会費	1,790,000	1,578,000	2006年7月6日現在学生会員数679会費納入率69%
	賛助会員年会費3万	60,000	30,000	2006年7月6日現在 2件
	賛助会員年会費10万	1,400,000	1,000,000	2006年7月6日現在 13件
	前受け金		19,000	2007年度以降の年会費
	預金利息	20	29	
	広告料	1,140,000	760,000	
	NSR編集室より管理費	1,500,000	750,000	125,000円×6ヶ月分
	2005年大会より返金	2,000,000	2,000,000	
	2005年大会より寄付	1,600,000	1,606,992	
	雑収入	300,000	318,170	1)
収入計	54,843,832	45,270,003		
支出	1. 事業費			
	ニュース印刷費	2,400,000	904,810	2006. N01～N03
	ニュース発送費	3,500,000	1,531,696	2006. N01～N03
	大会補助金	2,000,000		第30回大会へ
	NSR補助金	2,500,000	2,500,000	
	奨励賞賞金	400,000		受賞者5人のために、50万円支出見込
	優秀論文賞賞金	600,000		
	Travel Award賞金	1,000,000		
	大会抄録集制作発送費	1,200,000		
	会費分担金	1,989,000	487,480	2) のうち、'05年IBRO分担金と生物科学学会連合支払済み
	学術活動支援費	500,000	200,000	生理研トレーニングコース支払済
	国際交流費	100,000		講師派遣、IBRO関係理事会出席
	調査宣伝費	500,000	100,000	弁護士顧問料、その他
	2. 管理費			
	事務員業務委託費	16,000,000	7,308,656	フルタイム2人 パート1人(社会保険等を含む)
	会議費	300,000	75,425	理事会、その他委員会会議費
	通信費	1,000,000	326,299	
	旅費・交通費	1,000,000	714,910	
	印刷費	400,000	219,917	
	備品・消耗品費	500,000	77,132	
	事務室借料	2,790,900	1,395,450	232,575円×12
	ホームページ管理費	2,000,000	248,850	ホームページリニューアル等
	電話・光熱料	700,000	175,324	
	レンタル料	750,000	340,243	FAXコピー機レンタル料・ネット接続料等
	入金手数料	150,000	129,625	クレジットカード手数料など
	雑費	50,000	18,000	
	3. その他			
	事業費積立金	250,000	250,000	3)
	海外若手招聘基金積立	3,600,000	3,606,992	4)
	予備費	8,663,932	24,659,194	
支出計	54,843,832	45,270,003		

1) 2005年大会への一時貸付金の返金30万および、英文抄録売上 および、誤入金等

2) IBRO(2005年, 2006年度分担金4,000\$×2) FAONS(2005年度分担金2\$×正会員数) 生物科学学会連合

3) 事業費積立金 6,087,330円

4) 海外若手招聘基金積立金5,806,992円

会則改正箇所の抜粋

付 則

1 入会金は3000円、会費は正会員、外国人会員を年間9000円、学生会員を年間3000円とする。ただし外国人会員においては、**年次大会に筆頭発表者として参加する**との申し出により入会金を**免除し**、および会費を減免することができる**更に入会年度を含めて3年間は会費を免除することができる**。

2 正会員は左**下**に記す三**四**つのパネルの何れかに属するものとする。

一 分子・細胞神経科学、二 システム神経科学、三、臨床・病態神経科学 **四. その他の神経科学**

3 パネル理事定員は15名とし、その内それぞれ2名を**一から三**の各パネルに割り当て、残り9名を**一から四**のパネルに所属する正会員の数(選挙の年の4月1日現在)に比例して按分する。**按分にさいしては四捨五入法を用いる**。

4 理事会は下記の常置委員会を設置し、必要に応じて適宜、専門委員会を設ける。委員の任期は3年とし、連続の再任は2期までとする。

(常置委員会)

1 執行委員会 学会長を委員長とし、学会長、大会理事、庶務担当理事、会計担当理事で構成し、必要に応じて各種常置委員会の委員長を加える。

執行委員会は日本神経科学大会を除く学会の諸活動を策定し、理事会に提案する。

2 指名委員会(定員6名) 学会長を委員長とし、パネル理事と学会長の互選により委員を選出する。パネル理事の候補(定員の2倍以上)と推薦理事、各種委員会委員および科学研究費審査会委員**に関する**候補を理事会に推薦する。

3 選挙管理委員会(定員3名) パネル理事、科学研究費審査会委員などの選出に関わる全ての選挙管理を行う。

4 プログラム委員会(定員12名) 大会長を委員長とし、委員には前および次期大会長を加える。委員長は必要に応じて委員を追加することができる。大会のプログラムを策定する。

5 広報委員会(定員6名) 会報、機関誌出版、その他の広報活動を策定し、実施する。

6 将来計画委員会(定員10名) 神経科学の発展に必要とされるさまざまな施策を策定する。

資料4

7 Neuroscience Research 委員会 学会機関誌 Neuroscience Research の編集・出版を管掌する。委員の選出、活動は Neuroscience Research 委員会の内規による。

平成18年度
日本神経科学学会総会報告

日時:2006年7月20日(火)18:00-19:00
会場:Neuroscience 2006 会場 国立京都国際会館 Room-C-1

議題

1. 宮下庶務理事より2006年7月6日時点での会員構成の状況が報告された(理事会報告資料1,2 参照)。

2. 森会計理事より2006年6月30日までの会計中間報告がなされた(理事会報告資料3 参照)。

3. 津本 Neuroscience Research (NSR) 編集主幹より NSR の入稿状況、掲載論文の被引用状況等の報告がなされた。また、2005年の NSR 優秀論文として以下の3論文を選定した旨報告があった。

Masahiko Fujita, Feed-forward associative learning for volitional movement control. 52: 153-165, 2005

Noritaka Ichinohe, and Kathleen S. Rockland, Zinc-enriched amygdalo- and hippocampocortical connections to the inferotemporal cortices in macaque monkey. 53: 57-68, 2005

Yu-Lai Wang, Wanzhao Liu, Etsuko Wada, Miho Murata, Keiji Wada, and Ichiro Kanazawa, Clinico-pathological rescue of a model mouse of Huntington's disease by siRNA. 53: 241-249, 2005

4. 木村實第29回大会大会長より第29回日本神経科学学会大会の開催状況が報告された(本紙 第29回日本神経科学学会のご報告参照)。

5. 田中啓治第30回大会大会長より2007年9月9日から12日まで開催予定の第30回大会の準備状況について報告がなされた(Neuroscience 2007 第30回日本神経科学学会のご案内参照)。

6. 岡野栄之第31回大会長より、2008年7月9日より7月11日まで東京国際フォーラムにて開催予

定の第31回大会の準備状況が報告された。

7. 伊佐 正 第32回大会長より、2009年7月23日から7月25日で、京都国際会議場において、26日より開催される国際生理学会に連結する形で開催する意向、および、準備状況について報告があった。

8. 会則改定案について報告され承認された（理事会報告資料4参照）。

総会に引き続き同会場において、時実利彦記念賞2006年度受賞者、日本神経科学学会奨励賞2006年度受賞者、2006 Travel Award 受賞者の表彰式が行われた。

時実利彦記念賞受賞者

森 憲作（東京大学）

嗅球の機能マップおよび大脳嗅皮質の働きについての研究

2006年度日本神経科学学会奨励賞受賞者

池谷 裕二（東京大学）

皮質ネットワーク演算とその高次可塑性に関する解析

宇賀 貴紀（順天堂大学）

大脳皮質視覚連合野における両眼立体視機能の解析

掛川 渉（應義塾大学）

シナプス機能を担うグルタミン酸受容体の生理的役割と動態に関する研究

久場 博司（京都大学）

層状核における聴覚同時検出精度の特徴周波数依存性

田中 真樹（北海道大学）

眼球運動の制御における視床および前頭葉の役割に関する研究

2006 Travel Award の受賞者名、受賞課題

大会プログラムおよび、HP参照

Neuroscience Research (NSR) からのお知らせ

先日7月18日に京都で開催されましたNSR編集委員会で議論された話題の中から特に重要と思われる事項等についてご報告致します。

1. Editorial Board Memberが9月1日より一部交代しました。詳しくはNSRのホームページ <http://www.jnss.org/NSRoffice/> をご覧下さ

い。投稿される時に関係のある Receiving Editor に関しましては、Cellular Neuroscience Section への投稿原稿の増加に対応するため大阪大学の内山安男教授が新たに参入されました。Developmental Neuroscience Sectionでは昨年逝去されましたLawrence Katz教授に代わって米国Case Western Reserve大学のLynn Landmesser教授が参加されました。Neurochemistry SectionではThomas Soderling教授の代わりにインドNational Brain Research CentreのVijayalakshmi Ravindranath教授、三木直正教授の代わりに新潟大学の五十嵐道弘教授が就任されました。Clinical Neuroscience SectionではJohn Rothwell教授に代わりHarvard大学のRobert McCarley教授が就任されました。

2.NSRに受理された論文でFirst Author及びCorresponding Authorが日本神経科学学会会員の場合は、Receiving EditorとEditor-in-Chiefの了承の元に、全てのカラー図を無料とすることになりました。現在まで、1論文につき1図は無料でしたが、それ以上は1図300ユーロと有料でした。ご存知のように、最近はそのようなイメージングデータが増えカラー表示の重要性が増しております。優れた論文をNSRにご投稿いただく契機の一つとなるようお願いいたします。

3. 2005年のNSRのImpact Factorは2.184でした。2004年は2.155でしたので、微増ということになります。図1に示しましたように、NeuroreportやNeuroscience Letterが下降し、NSRは相対的には上昇傾向にあるように見えます。また、Experimental Brain Research, Developmental Brain ResearchやMolecular Brain Researchも低迷しています（図1の注釈参照）。勿論、Impact Factorだけがジャーナルの知名度、注目度を表すわけではありませんが、それにしてもNSRの約2.2は未だ健全な値とは思われませんので、3から4とよりまともな値を目指したいと思っています。また、科学ジャーナルの電子化にともない各論文のダウンロード数も論文の注目度を表す指標として重要視されてきました。図2はNSR掲載論文の毎月のダウンロード数の変化を示したものです。この数で見る限り注目度は年々改善しているように思えます。

Neuroscience Research編集主幹 津本 忠治

IBRO 理事会報告 議事録よりの抜粋

津本忠治

IBRO 理事会が去る7月8日にウィーンで開催されました。日本神経科学学会からは会長代理として狩野理事が出席されましたが（理事会報告参照）、8月21日にその議事録がIBRO事務局より送られてきました。以下に重要と思われる部分の一部のみ転載致します。全文は以下のサイトにありますので、詳しくはそちらをお読み下さい。

[http://www.ibro.info/
Pub_Main_Display.asp.Main_ID=314.](http://www.ibro.info/Pub_Main_Display.asp.Main_ID=314)

Minutes of the IBRO Governing Council Meeting

Saturday, July 8, 2006
Vienna, Austria

Present

Albert Aguayo, President (Chair)
Jenny Lund, Secretary General
Stephanie de La Rochefoucauld, Ex. Dir.
Stephanie Wubben, Dir. Programmes
Andree Blakemore, Web Editor
Ante Padjen, Webmaster, IT Dir.
Micaela Morelli, Societa Italiana di Neuroscienze
Marian Joels, Royal Netherlands Academy A & S
Fotini Stylianopoulou, Hellenic Soc. NS
Piergiorgio Strata, Publications Committee
Marina Bentivoglio, SG Elect
Monica di Luca, WERC Chair
Pavel Balaban, CEERC Chair
Annica Dahlstrom, Nominating Committee
Josef Syka, Czech Academy of Sciences
Jose M Delgado-Garcia, Spanish Soc. for NS
Andrew Gundlach, Australian NS Society
Ann Turnley, Melbourne Congress
Leon Zagrean, Romanian Soc NS

Ana Sebastiao, Portuguese Soc. for NS
Giovanni Berlucchi, IBRO ICSU Rep
Sigismund Huck, Board of IBRO Schools
Duncan Banks, British Neuroscience Assoc.
Tamas Freund, FENS
Sten Grillner, Membership Committee
Susan Sara, Alumni Committee Chair
Marty Saggese, Executive Dir., SfN
Ivica Kostovik, Croatian Soc. of Neuroscience
Ljubisav Rakic, Society for NS of Serbia/Montenegro
Abdu Adem, NS Group of United Arab Emirates
Michal Novak, Slovak Society for Neuroscience
Laurence Garey, IRNTP
Tarja Stenberg, Brain Research Soc. of Finland
Arpad Dobolyi, Hungarian Nat .Com. of IBRO
Arpad Parducz, Hungary
Ryszard Przewlocki, Polish Neuroscience Society
Maja Bresjanac, Slovenian Neuroscience Assoc.
Gerard Boer, Dutch Neurofederation
Tamar Bardadze, AGN
Friedrich Barth, Austrian Academy of Sciences
Zui Wollberg, Israel
Stephanie Clarke, Swiss Society for Neuroscience
KP Hoffman, German Neuroscience Society
Masanobu Kano, Japan Neuroscience Society

略

3. Marina Bentivoglio was welcomed as Secretary General Elect. Her term will begin January 1, 2007, ending on December 31, 2009.

4. Report from the Secretary-General, Jenny Lund.
Jenny Lund reported that she arrived in Vienna after spending three weeks visiting five different cities in China to discuss neuroscience programs in the region. She

suggested that actions should be taken to encourage the Chinese government to fund scientific research. Currently most post-doctoral researchers are pursuing careers abroad and many of them are not likely not return to their home country.

The Asia Pacific Regional Committee (Chair, Y.S. Chan) plans to have a two week school in conjunction with 4th Federation of Asian-Oceanian Neuroscience Societies (FAONS) Congress in Hong Kong in December 2006. The committee is also planning a school in Mumbai in September.

The African Regional Committee (Chair, Raj Kalaria) has successfully collaborated with other IBRO Committees to fund neuroscience events. They have just completed a school in Cape Town which was a joint effort with the US/Canada Regional Committee. They are also partnering with the Clinical/Basic Science Program to fund an Association pour la Promotion des Neurosciences (APRONES) 2006 biennial conference and a joint symposium on "Infectious disease and the brain" in Kinshasa, Democratic Republic of Congo (DRC).

略

5. Treasurer Report, Stephanie de La Rochefoucauld for Steve Redman
The income generated by "Neuroscience", the IBRO Journal is levelling out at almost 2 million euros. Membership dues are nearly 50,000 euros and outside funding is approximately 115,000 euros for a total income of around 2.1 million euros.

The assets include holdings at Credit Lyonnais, Berstein Investments and the property value of the IBRO office in Paris totalling almost 8.4 million euros. Total liabilities are about 1.5 million euros from unspent funds and carryover from

2005. The 2005 Treasurer's Report was approved by the Governing Council.

6. Committee Reports

略

Publications Committee: Chair, Piergiorgio Strata

Profits from the journal maintained its slight positive trend.

The submission of the papers is now done entirely online. Submissions increased by 6% from 2004 to 2005: the prediction for 2006 is of a 1% increase.

For 2004 and 2005 the rejection rate averaged 46% for 2004 and 2005.

The time-to-first-decision (*i.e. from submission of manuscript to first response (provisional decision) of reviewer/editor back to authors*) is down to 32 days (1st quarter of 2006) from 41 days in 2005 and 31 days in 2004.

Time to on line publication dropped from 10.5 to 7.5 weeks.

The impact factor is practically unchanged at 3.4.

As reported in 2005 the commissioning of Review and Special Issues have been editorial priorities. There have been three special issues since the last Governing Council Meeting: November 2005 "Quantitative Neuroanatomy", March 2006 "Neuroactive Steroids", and April 2006 "Working Memory". There is also a special issue planned for 2007 "DNA repair and genome instability in the CNS."

7. IBRO World Congress, Melbourne, July 12-17, 2007 Andrew Gundlach

Andrew Gundlach, Member of the Congress Local Organizing Committee, reported on

the progress of the congress planning. Eight plenary lectures, 64 symposia and 16 satellites have been selected for inclusion into the Scientific Programme. The Congress web site is www.ibro2007.org. Abstracts for poster submission will be called for in October 2006 with a closing date of January 31, 2007. Early registration will end January 31, 2007 also. Notification of acceptance of abstracts will be made by April 16, 2007.

Applications for travel fellowships are now available online with a deadline of October 31, 2006. There were discussions regarding how the travel grants will be administered. The Local Organizing Committee will discuss this situation with their Conference Consultant and report at the next Governing Council Meeting in Atlanta, Georgia.

The Committee has secured almost 200,000 AUD of funding in addition to IBRO's 150,000 USD in stipends for travel to the meeting. These resources will ease the cost of the registration for students and registrants from countries with limited financial resources.

There is Neuroscience School planned for July 2-6, 2007 in Melbourne sponsored by APRC which will focus on NSCs (neural stem cells), behavior, electrophysiology, and neuroinformatics. There will be separate applications and travel fellowships for these students. The importance of organizing a special programme of scientific activities for the IBRO Alumni, including in this prearranged visits to laboratories in Melbourne and other Australian centers was emphasized.

8.. Reports from Affiliated Organizations..

略

動物愛護管理法の改正にともなう 新たな指針、基準の制定について

日本神経科学学会
動物実験・倫理委員会
委員長 伊佐 正

「改正動物愛護管理法」が本年6月より施行されました。今回の法改正により、いわゆる「3Rの原則」が明確に規定され、これにより「実験動物の福祉向上」という、動物実験に対して動物愛護管理法が果たすべき役割に一定の整理が行われたと考えられます、そしてこの法改正を受けて関係行政機関や団体等において動物実験適正化についての指針、基準、ガイドライン等が作成されました。本稿では、これらを整理して学会員の皆さんにお伝えし、各機関・研究室などにおいて適切な対応が取られるよう注意を喚起したいと思います。

「実験動物の福祉向上」と「動物実験の適正化」とは基本的に異なる事項です。実験動物の福祉向上については、環境省によって制定された『動物の愛護及び管理に関する法律』（以下、動物愛護管理法）と『実験動物の飼養及び保管並びに苦痛の軽減に関する基準』（以下、基準。）によって規定されています。一方、動物実験の適正化は、文部科学省の『研究機関等における動物実験等の実施に関する基本指針』や厚生労働省の『厚生労働省における動物実験等の実施に関する基本指針』（以下、あわせて、『基本指針』）によって規定されています。そして日本学術会議は、両省からの依頼を受け、上記の基本指針を踏まえて、各研究機関が動物実験等に関する機関内規程を整備する際のモデルあるいは参考となる共通ガイドライン - 『動物実験の適正な実施に向けたガイドライン』を作成し、本年6月1日に公表しました。各研究・教育機関は、『動物愛護管理法』、『基準』、『基本指針』に基づき、『ガイドライン』を参考にして、「実験動物の福祉向上」と「動物実験の適正化」を併せた具体的な機関内規定を定めなくてはなりません。

1. 改正動物愛護管理法

(本文：http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/law_series/law.pdf)

動物愛護管理法の対象となっている動物は家庭動物（いわゆるペット、愛玩動物）から、動物園等で展示されている展示動物、実験動物、畜産等の産業動物など、対象範囲（利用目的）が広くおかれています。そのなかで、実験動物や産業動物では、致命的利用が主になるため苦痛の軽減等に重点が置かれています。つまり、同法は、動物の利用について、実験利用を否定しているものではなく、実験動物の福祉向上に特化した法律であるといえます。今回の改正で、動物愛護管理法に、それまで明記されていた苦痛の削減（Refinement）に、代替法の活用（Replacement）、使用数の削減（Reduction）が追加され、「3Rの原則」全てが明記されることになりました。改正動物愛護管理法では、追加された「代替法の活用」、「使用数の削減」は、主として科学研究としての適正な動物実験という観点からその遵守指導が行われることが妥当とされ、「配慮事項」とされました。一方、「苦痛の軽減」については、『基準』が策定され、努力義務が課せられることとなりました（第41条）。なお、実験動物であっても、科学的合理性なしにみだりに殺し、傷つけ虐待したものには本法によって罰則が適用されます（第44条）。

2. 「基準」の詳細・・・実験動物の福祉向上『実験動物の飼養及び保管並びに苦痛の軽減に関する基準』（環境省）

（本文：http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/law_series/nt_h180428_88.html）

『基準』は、動物愛護管理法第41条（動物を科学上の利用に供する場合の配慮）第4項と第7条（動物の所有者又は占有者の責務等）第4項に基づき定められています。今回の『基準』のポイントの1つは、「実験動物の苦痛の軽減」に関する基準という性格の明確化です。「動物を科学上の利用に供することは、生命科学の進展、医療技術等の開発のために必要不可欠」「動物に対する感謝の念と責任を持って適正な飼養及び保管並びに科学上の利用に努めること」、「3Rの原則」と明示されました。また、今回加えられた「周知」の項目に、「実験動物の飼養及び保管並びに科学上の利用が、客観性及び必要に応じた透明性を確保しつつ動物の愛護及び管理の観点から適切な方法で行われるように、管理者は、本基準の遵守に関する指導を行う委員会の設置・・・本基準に則した指針の策定等の措置を講じる等により、施設内における本基準の適正な

周知に努めること。・・・当該周知が効果的かつ効率的に行われる体制の整備に努めること。」とされています。

第1 一般原則

1 基本的な考え方：動物を科学上の利用に供することは、生命科学の進展、医療技術等の開発等のために必要不可欠なものであるが、その科学上の利用に当たっては、動物が命あるものであることにかんがみ、科学上の利用の目的を達することができる範囲において、できる限り動物を供する方法に代わり得るものを利用すること、できる限り利用に供される動物の数を少なくすること等により動物の適切な利用に配慮すること、並びに利用に必要な限度において、できる限り動物に苦痛を与えない方法によって行うことを徹底するために、動物の生理、生態、習性等に配慮し、動物に対する感謝の念及び責任をもって適正な飼養及び保管並びに科学上の利用に努めること。また、実験動物の適正な飼養及び保管により人の生命、身体又は財産に対する侵害の防止及び周辺的生活環境の保全に努めること。

上記以外に、今回「基準」に付け加えられた主な配慮事項や努力義務は、以下の通りです。

飼養及び保管の方法：実験動物が、実験等の目的に関わらない疾病・傷害を得た場合の適切な治療等の措置。飼養環境への順化・順応を図るための措置など。

施設の構造等：実験等の目標に支障を及ぼさない範囲で、個々の実験動物が日常的な動作を容易に行うための広さと空間、温度、湿度、換気、明るさ、衛生管理の容易な構造など。

教育訓練の確保。

危害等の防止：動物が逸走しない強度・構造の施設。実験実施者と飼養者が安全に作業ができる施設の構造と飼養保管の方法の確保。実験動物の数と状態の確認（施設の保守点検や定期的な巡回など）。

有毒動物の飼養保管：緊急時の対応体制作りと危害の発生防止措置。

逸走時の対応と緊急時の対応：関係機関への連絡等や地震火災等において採るべき措置などの計画をあらかじめ作成するなど。

人獣共通感染症に関する知識の修得

実験動物の記録管理の適正化

(その方法：入手先、飼育履歴、病歴等に関する記録台帳の整備など、個体識別措置)

施設廃止時の取扱い

実験等に供する期間をできるだけ短くする等、実験終了の時期に配慮。

繁殖：幼齢又は高齢の動物を繁殖の用に供さない、みだりに繁殖に用いることでの動物への負担を避ける（ただし、系統の維持など特別の事情がある場合は、除外）

3. 「基本指針」と「ガイドライン」…動物実験の適正化

1) 『研究機関等における動物実験等の実施に関する基本指針』（文部科学省）

(本文：http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/06060904.htm)

2) 『厚生労働省の所管する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針』

(厚生労働省)

(本文：<http://www.mhlw.go.jp/general/seido/kousei/i-kenkyu/doubutsu/0606sisin.html>)

3) 『動物実験の適正な実施に向けたガイドライン』（日本学術会議）

(本文：<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-20-k16-2.pdf>)

「動物実験の適正化」については、研究機関による自主規制との方針が選択され、3 R全体を網羅した動物実験指針（いわゆる「基本指針」）が、科学技術を所管する行政機関（文部科学省、厚生労働省）によって新たに策定されました。これを基に、各研究機関は、機関内規程を策定することになりますが、基本指針は、適正な動物実験を行うための基本的枠組みのみを示しています。そこで、各研究機関が機関内規程を整備する際の参考

となる、共通ガイドライン（いわゆる詳細指針）の作成が、両省より日本学術会議に依頼され、『動物実験の適正な実施に向けたガイドライン』（以下、『ガイドライン』）が作成されました。

今回、文部科学省の指針の策定にあたっては、旧文部省の局長通知「大学等における動物実験について」を参考に、これに加筆修正する形で議論が進められました。例えば、機関の体制整備について、責任の主体が明確にされました。動物実験等の実施に関する最終的な責任を有するのは、機関の長であり、動物実験委員会と機関内規程を策定する。動物実験責任者が作成した動物実験計画は、機関の長の諮問により動物実験委員会によって審査される。その審査の報告をもとに、機関の長は動物実験計画を承認または却下するかを決定し、また、動物実験計画の実施の結果について報告を受け、把握する、ということです。さらに、動物実験実施者、実験動物の飼養・保管に従事するものの資質向上のための教育訓練、自己点検評価、情報公開なども責務とされました。動物実験委員会の役割と委員構成、動物実験の必要性の説明の記述、透明性確保のための自己点検とその評価、情報公開については、多くの時間を割いて議論がされた、とのことでした。

ガイドラインは、文部科学省、厚生労働省の依頼により学術会議によって作成され、各研究機関が動物実験に関する機関内規程を整備する際のモデルあるいは参考となるよう、省庁横断的に「基本指針」や「基準」を踏まえて、具体的に記述された詳細指針ですが、実験動物の飼育などについて、研究目的によって条件は一律ではないため、数値基準は示されていません。あげられている項目としては、機関等の長の責務、動物実験委員会、動物実験計画の立案および実験操作、供試動物の選択並びに授受、実験動物の飼養および保管、実験動物の健康管理、施設等、安全管理、教育訓練等の実施、その他（情報公開などについて）です。

4. まとめ

最後に、「基準」の親法である「動物愛護管理法」の今回の改正では、改正を検討する「あり方検討会」、各政党の委員会（動物愛護管理法は議員立法による法律であるため）、愛護部会などで、3 Rの原則を実効あらしめるための許認可制度について、議論されたことも付け加えておきたいと思います。最終的に許認可制度は導入されませんが、これは動物実験の適正化方策として、

行政による許認可指導ではなくて、「自主管理」に
よることがより妥当であると判断されたと考えら
れます。つまり、規制を講じる必要性があるほど
の著しい公益性の侵害が認められなかったと考え
られます。ただし、動物実験における「自主管理」
とは、「自由放任という意味の自主管理」ではな
く、行為の管理プロセスのみが「自主管理」とい
う理解が重要です。5年後には、再び「動物愛護
管理法」が改正の時期となり、その1-2年前か
ら再度改正の議論が開始されると思われます。

今回の「基準」や「動物実験指針」は、研究者、
実験動物の専門家、動物福祉団体の代表者、法律
の専門家など多くの人々が長い期間、真摯に議論
を重ねて策定したものです。私は、神経科学学会
の代表としてヒアリングに呼ばれ、委員会で説明
を致しましたが、ここで、各委員会の委員が、貴
重な時間とエネルギーをかけ、この策定に取り組
まれたことに、深く感謝の意を示したいと思いま
す。そして、このような努力が水泡に帰すると
いったことにならないよう、本学会に所属される
研究者の皆様には、今後とも適正な動物実験が行
なわれる体制が継続できるよう、一人一人のご理
解とご努力を切に願うものです。

最後に、本稿をまとめるにあたりまして、各種委
員会の傍聴をはじめ資料収集・整理の労をお取り
いただきました宮地まりさん（ニホンザルバイオ
リソースプロジェクト・生理研）に感謝いたしま
す。

NGF2006に参加して ～ Rita Levi-Montalcini と 128 人の 神経栄養因子の研究者～

産業技術総合研究所
セルエンジニアリング研究部門
小島正己

フランスのリヨンで開催された NGF カンファレ
ンス(5月25日-29日)に出席した。神経栄養因子
の国際会議は NGF カンファレンスと Gordon
Research Conference (GRC) があるので、この
分野の研究者は毎年充実した議論の場が持てる。
このようなサークルが分野の発展を促進するが、
各研究者にとって重要な Pre-review の場でもある。

第1回の NGF カンファレンス(1986年)は Rita
Levi-Montalcini の 77 回目の誕生日を祝い、そ
の秋 Rita はノーベル賞を受けたと聞いている。8
回目となる今回は Rita の 30 分のスピーチからス
タートした。Rita は Stem cell biology への期
待を皆に強調した。しかし、会議中は一番前の席
であらゆる発表を聴きコーヒブレイクでは参加
者とのデスカッションを楽しんだ。我々は Rita の
情熱的な背中を見ながら毎日を過ごしたのであ
る。

今回の会議のキーワードは R2S(Research to
Society)であった。これまで取り組んできた R2B
(Research to Business)に加えて、例えば、神
経栄養因子と Psychiatric and behavioral state
の関係を明らかにし神経精神疾患の治療に貢献し
たいというものである。うつ病と BDNF シグナル
の関係を研究する Eero Castrén (Helsinki
Univ., Finland)は、抗うつ剤の投与により海馬
と前頭前野の BDNF 受容体(TrkB)を活性化しこの
シグナル伝達が海馬神経細胞の新生を賦活化する
ことを示し、うつ病に対する新たな栄養因子治療
モデルを提唱した。中枢の神経変性を研究する
Antonio Cattaneo(EBRI, Italy)は、NGF 抗体産
生トランスジェニックマウス(AD11)を作製し、前
脳基底野コリナージュックニューロンの脱落、アミ
ロイド蛋白の沈着、リン酸化タウタンパク質の蓄
積が観察している。Cattaneo は、脳で産生された
NGF 抗体が成熟型 NGF のみを捕らえ前駆体型 NGF
には結合しないこと、前駆体型 NGF に高親和性に

結合するp75受容体のノックアウトマウスとの交配によりAD11のアミロイド沈着が減少することを示し、前駆体型NGFとアルツハイマー病の関係を提唱した。NGFの前駆体が神経細胞死を促進することをはじめて報告したBarbara Hempstead(Cornell Univ., USA)は、NGFとBDNFについて前駆体型をコンディショナルに発現するノックインマウスの解析に取り組んでいた。現在12種類のCr-lox発現マウスの交配と解析を進めており、前駆体型神経栄養因子の生理機能が今後解明されていくと思われる。抗体治療についても興味深い報告があった。NGFの過剰産生による痛覚過敏は以前から研究されているが、Franz Hefti(Rinat Neurosci. Corp., USA)はNGFに対するHumanized monoclonal antibody (RN624)を作製しOsteoarthritis painに対する効果を報告した。研究はすでにPhase Iに進んでおりOsteoarthritis painに対する治療薬の開発が期待される。

BDNFのpolymorphisms(SNPs)は、神経栄養因子の重要なポストゲノム研究と考えられている。Bai Lu(NIH, USA)は、BDNFの5'UTRに存在するpolymorphism(C270T)が細胞体から伸展するデンドライト数とヒト脳の大きさに強く影響することを示した。Jordi Alberch(Univ. de Barcelona, Spain)は、Huntington's diseaseのモデル細胞にVal66Met変異をもつBDNF-GFPを導入しGFP蛍光の細胞内トラフィックをFRAP(Fluorescence recovery after photo-bleaching)により観察した。Mutant huntingtin(111Q/111Q)はBDNFのPost-Golgi traffickingを抑制することを見出したが、Val66Met変異がBDNFのTraffickingをさらに抑制することはなかった。BDNFのpolymorphisms(SNPs)の分子機能を研究しているMasami Kojima(AIST, Japan)は、BDNFのプロセッシングに影響するpolymorphismsの解析結果を報告し、BDNF polymorphismsのノックインモデルマウスのフェノタイプを紹介した。疾患モデル細胞を用いたBDNFのSNPs解析やノックインモデル動物の作製は、今後の神経系遺伝子のSNPs研究にも有用と考えられる。

日本からは2人の神経栄養因子の研究者が参加した。Nobuyuki Takei(Niigata Univ., Japan)は、BDNFがシナプス近傍における局所的な蛋白合成を活性化することを示し、学習が成立したラットの海馬錐体細胞のデンドライトにおいて蛋白合成が活性化されていることを報告した。日本からの

2人の参加者は、議論と情報収集に疲れ一喜一憂もした。しかし、この分野の重要性と興味を再確認したのは間違いなかった。次回メンバーが集うのは来年の6月のGRC2007と思われる。

写真の説明

First speakerのRita Levi-Montalcini(右)とConference chairのBrian Rudkin(左)



INFORMATION

シンポジウム・研究会



第29回
神経研シンポジウム
「神経変性と癌の
統合的戦略」

日時:2006年10月6日(金)13:00 - 17:35
会場:新宿明治安田生命ホール(東京都新宿区西新宿1-9-1)JR新宿駅西口出口正面
定員:先着300名(参加予約不要)
参加費:無料

◇演題・講演者◇

1. 「シヌクレインによる細胞分化の解析」
橋本 款(東京都神経科学総合研究所)
2. 「壮・老年期神経疾患の発症の切っ掛け: 臨界期に関する胎生期からの観察」
小 清光(東京都神経科学総合研究所)
3. 「神経変性疾患脳における封入体形成とユビキチン関連蛋白」
若林 孝一(弘前大学医学部)
4. 「久山町研究(前向きコホート疫学研究)における変性型認知症」
岩城 徹(九州大学大学院医学研究院)
5. 「学習記憶を指標とした加齢による神経変性の解析」
齊藤 実(東京都神経科学総合研究所)
6. 「大脳皮質発生における転写抑制蛋白RP58」
岡戸 晴生(東京都神経科学総合研究所)
7. 「神経変性疾患発症におけるp53癌抑制経路の役割」
岡本 康司(国立がんセンター研究所)
8. 「14-3-3蛋白とユビキチンリガーゼ Efpによる細胞周期制御機構」
浦野 友彦(東京大学医学部附属病院)

問合せ先:

〒183-8526 東京都府中市武蔵台2-6

(財)東京都医学研究機構 東京都神経科学総合研究所 事務室 調査係
TEL:042-325-3881(内4104)
FAX:042-321-8678
E-Mail: chosal@tmin.ac.jp
ホームページ: <http://tmin.ac.jp/>



「第1回ブレインバンク
シンポジウム」の
ご案内

テーマ:「精神疾患死後脳研究の
ニューストラテジー」
オーガナイザー: 池本桂子、丹羽真一
(福島県立医科大学神経精神医学講座)

シンポジスト: Rivka Ravid(Netherlands Neuroscience Institute)、Kiminobu Sugaya (University of Central Florida)、富田博秋(東北大学大学院)、池本桂子(福島県立医科大学)、丹羽真一(福島県立医科大学)、橋本恵美(札幌医科大学)、西村明儒(横浜市立大学)、加藤忠史(理化学研究所)、一瀬宏(東京工業大学大学院)、瀬藤光利(岡崎統合バイオサイエンスセンター)、宮川剛(京都大学大学院)ほか
内容: 死後脳研究の必要性、死後脳研究の問題点、精神疾患ブレインバンクの整備と拡張、死後脳研究の新たな手法、ディスカッション、最近の知見 など

日時:2006.10.22.(日) 10:00 ~ 17:00 懇親会 17:30
会場:ホテル辰巳屋(JR 福島駅前)
会費:5000円(昼食代を含む)
懇親会費 3000円

事前参加登録受付: 2006.10.15. までに
ファックスまたは電子メールでお申し込みの上、会費と懇親会費は、当日受付にてお支払いください。当日参加登録も可能です。

後援: 日本学術振興会、NPO 法人精神疾患
死後脳・DNA バンク運営委員会
シンポジウム事務局:
福島県立医科大学神経精神医学講座内
福島精神疾患ブレインバンク
電話 024-547-1331 Fax 024-548-6735
e-mail bbs@fmu.ac.jp

多数のご参加と活発なご討論をお待ちしております。

千里ライフサイエンス セミナー



「オートファジーによ る細胞内自己消化一分 子機構から 生理機能へ」

着眼点: 一細胞は自分を食べるー
細胞は飢餓に陥ると、まるで飢えたタコが自
分の足を食べるように自己の一部を分解して
栄養源にする。オートファジーと呼ばれるそ
の分解システムのメカニズムが最近解明され
始め、それと同時にオートファジーが感染症
や神経変性疾患の抑止、抗原提示、プログラ
ム細胞死など多彩な生理機能に関わることが
明らかになってきた。我が国が世界をリード
する本研究分野の現況を紹介する。

講師:

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科教
授 水島 昇

順天堂大学大学院医学研究科教授

木南 英紀

自然科学研究機構基礎生物学研究所教授

大隅 良典

大阪大学微生物病研究所教授

吉森 保

大阪大学大学院医学系研究科教授

内山 安男

大阪大学大学院医学系研究科助教授

大津 欣也

日時:

平成 18 年 11 月 13 日(月)10:00 ~ 17:00

場所: 千里ライフサイエンスセンタービル 5
階ライフホール

参加費: 会員(大学・官公庁職員、当財団の
賛助会員)3,000 円; 非会員 5,000 円; 学生
1,000 円

申込要領: 氏名、勤務先、〒所在地、所属、
電話番号、Eメールアドレス、および申込
区分(会員、非会員、または学生)を明記の
上、Eメールで下記宛お申し込み下さい。

申込先: 千里ライフサイエンス振興財団セミ
ナーW3 係 村上和久

〒 560-0082 大阪府豊中市新千里東町 1-4-2

千里ライフサイエンスセンタービル 8 階

TEL 06-6873-2001、E-mail sng-

lsf@senri-lc.co.jp

URL <http://www.senri-lc.co.jp>



脳と機械をつなぐ ーブレイン・マシン・ インタフェースの可能性

主催: 科学技術振興機構 CREST

日時: 2006 年 11 月 7 日(火)・8 日(水)

場所: 京都大学芝蘭会館稲盛ホール(京都市
左京区 京大医学部構内)電話 075-753-9336

オーガナイザー: 櫻井芳雄(京都大学)・

Miguel Nicolelis(Duke University)

プログラムとタイトルの詳細:[http://
www.psy.bun.kyoto-u.ac.jp/sakurai/
symposium.html](http://www.psy.bun.kyoto-u.ac.jp/sakurai/symposium.html)

11 月 7 日(火)

川人光男(ATR 脳情報研究所)

Niels Birbaumer(Eberhard-Karls-
University of Tübingen)

Koichi Sameshima(University of Sao
Paulo)

Miguel Nicolelis(Duke University)

小池康晴(東京工業大学精密工学研究所)

Eilon Vaadia(Hebrew University of
Jerusalem)

鈴木隆文(東京大学情報理工学系研究科)

佐藤雅昭(ATR 脳情報研究所)

神谷之康(ATR 脳情報研究所)

懇親会(芝罘会館山内ホール)

11月8日(水)

櫻井芳雄・高橋晋(京都大学文学研究科・科学技術振興機構)

Eberhard Fetz(University of Washington)

Joseph Rizzo(Harvard University)

八木透(東京工業大学情報理工学研究科)

参加費: 無料

懇親会費: 3000 円(学生 2000 円)

参加申込: 当日参加も可能ですが、出来るだけ事前にメールでお申し込みください。御氏名・御所属・懇親会参加の有無を

Tomomi.Yokoyama@bun.kyoto-u.ac.jp へお送りください。

本シンポジウムをはさんで11月6日と8日(午後)に『脳を活かす研究会』の「脳を繋ぐ」分科会が同会場で開催されます。詳しくは<http://www.cns.atr.jp/nou-ikasu/>をご覧ください。

国際交流(開催): ゲームに関する国際会議開催に対する助成

国際交流(参加): ゲームに関する国際会議への参加に対する助成

開催・参加あわせて総額 500 万円以内

応募資格: 国内の大学、短大、高専、研究所等の非営利の研究機関に所属する研究者(大学院博士課程在籍者を含む)または申請者を代表とする共同研究のグループ及びチーム

推薦: 研究助成 A については研究機関等所属長(学部長)の推薦が必要

ただし、助成希望額が 100 万円以下で、単年度で申請の場合は不要

締切: 平成 18 年 10 月 16 日(月)消印有効

詳細はホームページをご覧ください

URL: <http://www.nakayama-zaidan.or.jp/>



公募開始のお知らせ

財)ブレインサイエンス振興財団は、このたび下記の各助成について平成 18 年度の公募を開始いたしました。

塚原伸晃記念賞

締切り日: 平成 18 年 10 月 27 日(金)

研究助成

締切り日: 平成 18 年 10 月 27 日(金)

海外派遣研究助成

締切り日: 平成 19 年 1 月 19 日(金)

海外研究者招聘助成

締切り日: 平成 19 年 1 月 19 日(金)

詳細は財団ホームページをご覧ください。

URL: <http://www.bs-f.jp/>

研究助成



研究助成・ 国際交流助成課題募集

財団法人中山隼雄科学技術文化財団では「人間と遊び」という視点に立った科学技術に関する研究開発・調査研究の助成課題を募集します。今年度はゲームに関するテーマを重点的に取り上げることと致しました。

テーマ:

助成研究 A: ゲームの分野に関する研究
総額 4,000 万円以内 500 万円以下 / 1 件
複数年継続可 要推薦

助成研究 B: 「人間と遊び」に関する研究一般
総額 1,000 万円以内 100 万円以下 / 1 件
単年度



公益信託時実利彦記念賞 平成19年度申請者の 募集について

当基金は、下記要項により19年度申請者の募集を致します。

記

1. 趣旨

脳研究に従事している優れた研究者を助成し、これを通じて医科学の振興発展と日本国民の健康の増進に寄与することを目的とする。

2. 研究テーマ

脳神経系の統合機能及びこれに関連した生体の統合機能の解明に意義ある研究とする。

3. 研究助成金

「時実利彦記念賞」として賞状及び副賞(研究費)100万円を授与する。

4. 応募資格

原則として55歳以下とする。

5. 応募方法

所定の申請書に必要事項を記入し、主要論文のうち代表的なもの3篇以内の別刷一部を添付の上、下記事務局宛送付する。

申込締切日 平成18年12月8日(金)必着
申請用紙は、下記事務局宛請求する。

＜公益信託 時実利彦記念脳研究助成基金事務局＞

〒100-8212 東京都千代田区丸の内1-4-5

三菱UFJ信託銀行リテール受託業務部

公益信託グループ 担当 宮下

TEL 03-3212-1211 内 3374 Fax 03-6214-6253

公 募



獨協医科大学神経内科 免疫性神経難病 センター ポスドク、テクニカル スタッフ(数名)募集

URL: http://www.dokkyomed.ac.jp/dep-m/neuro/jap/gbs_q&a.html

研究内容 ギラン・バレー症候群などの自己免疫性神経疾患の発症機序解明と治療法開発に取り組んでいます。詳しくは、上記ホームページをご参照ください。

任期 最長5年間

応募資格 医学関係だけでなく、理工関係の方で、免疫学、神経科学に関心のある方。学位取得済みの方だけでなく、大学院修了予定の方、これから学位を目指そうという方。仕事、テーマは、これまでの経験によって考慮します。

着任時期 要相談

勤務地 獨協医科大学 神経内科 免疫性神経難病センター

(〒321-0293 栃木県下都賀郡壬生町北小林880)

問合先

〒321-0293

栃木県下都賀郡壬生町北小林880

獨協医科大学 神経内科 免疫性神経難病センター(担当: 結城伸泰)

E-mail: yuki@dokkyomed.ac.jp

電話 0282-86-1111(内線2578)



大阪大学大学院 生命機能研究科教授 の募集について

1. 公募人員 教授1名
2. 選考方針：細胞から個体レベルに至るまでの様々な制御ネットワークに関わる広い分野の人材を募集します。広い学術分野にまたがる研究者を擁する研究環境を活用し、分野融合型人材育成をめざす生命機能研究科の発展を担える方を望みます。
3. 研究室構成：助教授(準教授)、助手(助教)各1名を新たに選任出来ます。助手は5年の任期付(再任可)。
4. 応募資格：特に制限はありません。他薦も可。
5. 応募締め切り：2006年10月16日(月)(必着)
6. 着任時期：2007年4月以降、出来るだけ早い時期を希望します。
7. 選考方法：選考委員会の審議を経た上で、最終的に教授会で決定します。選考の過程でセミナーをお願いする可能性があります。
8. 提出書類：履歴書、業績目録(原著と総説を分けて記載)、主要論文15編の別刷(pdfファイルでも可)とその要約(各400字程度)、推薦書(2通)、現在までの研究の経緯とその特色(2000字以内)、生命機能研究科への着任後の研究・教育の抱負(2000字以内)、最近5年間に受けた研究助成金のリスト。上記書類一式の他、上記書類をワードファイル、またはpdfファイルに保存し、CD-ROMに焼いたもの。
9. 書類送付先・問い合わせ先：
〒565-0871 吹田市山田丘1-3 大阪大学大学院生命機能研究科 村上富士夫(選考委員長)電話：06-6879-4655 Fax:06-6879-4659
e-mail:f_murakami@fbs.osaka-u.ac.jp
簡易書留あるいはそれに相当する手段を用い、封書に「教員応募」と朱書きのこと。尚、応募書類等はお返しいたしませんのでご了承ください。
10. 詳しくは：
<http://www.fbs.osaka-u.ac.jp/jobs/> をご覧ください。



東京医科歯科大学 難治疾患研究所 メディカル・トップ トラック(MTT) フェローの募集

(文部科学省科学技術振興調整費「若手研究者の自立的研究環境整備促進」事業)

東京医科歯科大学難治疾患研究所では、難治疾患の克服を目指した独創的な基礎医学研究を推進する若手研究者を育成するシステムとして「メディカル・トップトラック(MTT)制度」を設立し、メディカル・トップトラック(MTT)フェロー(特任助教授、特任講師、特任助手相当、計15名程度)を国際公募します。

[応募資格] ポスドク終了およびそれに準ずる方(博士号取得後概ね10年以内)

[公募期間] 2006年10月31日までとしますが、適任者が決定され次第締め切ります。

[採用審査] 書類審査と面接(英語)の2段階審査。

[任用] 任期は大学の規定に従い、年次更新で最長2011年3月末まで。優れた研究成果を挙げたMTTフェローは、競争的テニュア昇進審査によりテニュア教員(本研究所の正式職員)に採用される可能性があります。

[応募書類]

ホームページ参照のこと(http://www.tmd.ac.jp/mri/info/koubo2006/mtt_koubo2006_1.html)。

[提出先]

〒101-0062

東京都千代田区神田駿河台2-3-10

メディカル・トップトラック(MTT)プログラム事務局

東京医科歯科大学難治疾患研究所長

野田 政樹

[問い合わせ]

メディカル・トップトラック(MTT)プログラム事務局 仲川 歩

e-mail: naka.mtt@mri.tmd.ac.jp

電話：03-5280-8106 FAX：03-5280-8081



富山大学大学院 理工学研究部教員公募

1. 所属

富山大学大学院理工学研究部 生命・情報・システム学域 ヒューマン・生命情報システム学系(電気電子システム工学科担当)

2. 職名

助教授又は講師 1 名

3. 採用予定年月日

平成 19 年 4 月 1 日以降のできるだけ早い時期

4. 研究分野・専門分野

下記の分野に関連し、本学科に於いてロボティックスに関する新たな教育研究分野を起ち上げていただける方

(1)人工知能、認知ロボット、ロボット Vision

(2)サイバネティックス

(3)計算神経科学、脳の計算論、Neuro-Computing、Brain-Machine Interface

5. 応募条件

(1)博士又は Ph.D. の学位を有すること

(2)大学院に於いて当該専門分野の専門科目を担当できること

(3)教育・研究に意欲的であること

6. 応募締切日

平成 18 年 12 月 1 日(金)必着

7. 応募書類

(1)履歴書

(2)研究業績リスト

(3)主要論文の別刷

(4)国内(際)学会での招待講演のリスト

(5)受賞歴

(6)過去 10 年間の科学研究費補助金採択状況並びに他の競争的研究資金獲得実績

(7)教育および今後の研究に関する抱負(2000 字程度)

(8)推薦書 2 通、自薦の場合は本人について照会可能な 2 名の方の氏名と連絡先

8. 応募書類提出先及び問い合わせ先

〒930-8555 富山市五福 3190

富山大学工学部 電気電子システム工学科
学科長 佐々木和男

Tel:076-445-6719

E-mail:sasaki@eng.u-toyama.ac.jp

なお、応募書類は封筒表に「教員応募書類」と朱書し、(簡易)書留にてご送付下さい。公募の詳細については http://www.u-toyama.ac.jp/jp/employ/pdf/eng_20061201_3.pdf をご覧下さい。

そ の 他



神経科学ニュースへの 原稿を募集しています

求人情報、学会・シンポジウムの案内、助成金の案内のほかにも、学会への提言、研究雑感、学会見聞録、書評等神経科学の発展につながるものであればどのようなものでも結構ですので以下の要領でお送りください。

1. 原稿は電子版のみを受け付けています。原稿は電子メール添付ファイルでお送り下さい。

a. 受付可能なファイル形式は Word、EG Word (11 以前)、KacisWriter です。それ以外にも或る程度対応可能ですが、事前にご相談ください。また作成に用いたアプリケーションに関わらず HTML, rtf ファイルは受付可能です。テキストファイルも可ですが、その場合メール本文に埋め込んでください。

b. 画像ファイルは PICT、JPEG または TIFF ファイルで、可能な限り圧縮して本文とは別のファイルでお送りください。

c. 求人情報、学会・シンポジウムの案内、助成金の案内に関しましては、A4 サイズ 2 段組で刷り上がりは、画像ファイルや、表などを含めて 1/2 ページ以内を単位として作製してください。なお、フォントは原則として、タイトルには 14 ポイント 30 文字以内、本文には 10 ポイント 850 文字以内を、目安にしてください。その際、画像ファイルや、表等を、掲載ご希望の場合は、その大きさを差し引いてください。

2. 著者校正は行いません(お送りいただいた

ファイルをそのまま利用します)ので、誤りの無いことをお確かめの上、原稿をお送り下さい。

3. ニュースへの掲載は1回のみとさせていただきます。

4. 求人情報、学会・シンポジウムの案内、助成金の案内などは特に御希望のない限り、神経科学学会のホームページにも掲載します。記事の長さに制限はありませんが、可能な限り簡潔におまとめ下さい。長すぎる原稿は一部割愛させていただく場合があります。

5. 他のサイトへのリンクは原則としておこなっておりませんのでご了承ください。

6. 締切は通例偶数月の月末25日ですが、都合により変動することがあります。

7. 掲載料は不要ですが、掲載依頼者は原則として学会員あるいは協賛・後援団体である事が必要です。

8. 原稿の送付の宛先は以下の通りです。
news@jnss.org (担当 白尾智明) 宛お送りください。

しいので、まずとりあえずは、編集委員会の企画記事の英語化を考えています。会員からの投稿記事については、著作権や英語に翻訳した場合の校正等を含め、多くの検討課題があり、当面英語化は実現は難しいという議論になっています。たとえば本号の場合は、大会関連の記事や動物愛護に関する記事などを英語版に載せることになると思います。英語版の発行は、日本神経科学学会の国際化のためには避けては通れないステップだと思っております。会員諸氏のお知恵を拝借したいと思いますので、何か良い案があれば編集委員会までご連絡ください。また、編集委員会ではこの機会に日本語版の紙面充実をも図るべく、新たな企画を検討中ですので、ご期待ください。(白尾記)

編集後記

暑かった夏も過ぎ去り、だいぶ過ごしやすくなってきましたが、会員諸氏におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。先日来、神経科学ニュースのあり方に関して議論が進められておりますが、印刷された広報誌としての神経科学ニュースの重要性は多くの人の納得のするところであるということになりました。さらによりよい神経科学ニュースを目指して、今後も検討を続けていくつもりです。ところで、先の京都での神経科学大会の際に開かれた編集委員会では、英語版の神経科学ニュースの発行について検討されました。英語版の発行となると、まず日本語版を英語に翻訳するという作業が必要になります。したがって、いわゆるお知らせ記事に関しては、その速報性という観点から、英語版に掲載するのは難

発行：広報委員会

狩野方伸（委員長）

白尾智明（ニュース編集小委員会委員長）

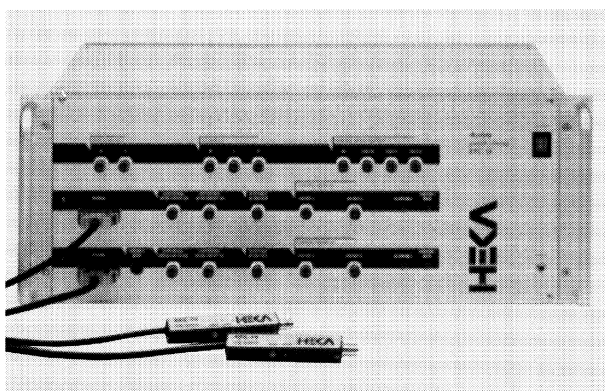
真鍋俊也（電子化推進小委員会委員長）

柚崎通介（ホームページ担当小委員会委員長）

アカデミック・フィールドの研究者のためにアカデミック・プライスを新しく設けました。
詳細は弊社のホームページ www.shoshinem.com をご参照下さい。

EPC-10 SINGLE DOUBLE TRIPLE

進化・発展を続ける最先端のパッチクランプ・テクニックをリードすべく、マックス・プランク最新のノウハウをすべて投入した次世代パッチクランプ・システムが、「ナンバー10」を冠して登場しました



EPC - 10/Double

～EPC-9 からの進化～

- ◇新開発のDA/ADコンバータである ITC-1600 を搭載。
アンプとPC間のコミュニケーションは光ファイバーを採用し、エラーおよびノイズを大幅に低減しました。
- ◇対応 OS は MacOS X、Windows NT、2000、XPと大幅に拡大
- ◇新意匠のスリムライン・ヘッドステージを採用。スペース・ファクタが大きな問題となるマルチチャンネル・レコーディングに対応すべく、スリムで軽量のヘッドステージを新たに開発しました。
- ◇カレントクランプ時における周波数特性の大幅な改善により、クランプエラーを低減しました。
- ◇低周波ボルテージクランプ (LFVC) に対応
- ◇C-fast 補正が不要な高入力抵抗採用の CClamp 回路

comes with **PATCHMASTER**

PATCHMASTER は、刺激波形の生成、データの収集等を行う PULSE ソフトウェアのマルチチャンネル版です。最大で 8 チャンネルまでを統合一元管理することができます。

※詳しい資料をご請求下さい

HEKA 社製品日本総輸入元



ショーシンEM株式会社

〒444-0241

愛知県岡崎市赤浜町蔵西 1-14

TEL: 0564-54-1231

FAX: 0564-54-3207

WEB: www.shoshinEM.com

E-MAIL: info@shoshinEM.com

HEKA 社製品日本総発売元

株式会社 otobe

〒444-0126

愛知県額田郡幸田町桐山細手 27-1

TEL & FAX: 0564-63-1367

携帯電話: 090-3388-7614

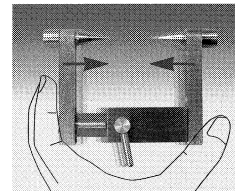
E-MAIL: kotobe@nifty.com

簡単に。確実に。ソフトに。

NARISHIGEの固定装置へのこだわり

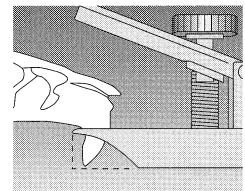
片手で簡単に操作できる補助イヤバー

二本の指で挟み込むようにするだけで滑らかに動作するアリ機構を採用。固定時の感触を指先で確かめながら、左右の耳部をソフトなタッチで固定することができます。



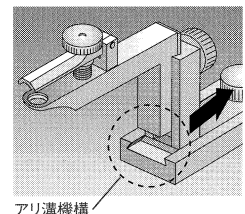
薄くて小さな口金具

マウスやラットの小さな口部に合わせて口金部を薄く、小さく設計しています。歯が固定されている様子が容易に確認でき確実な固定をサポートします。



滑らかに動作する位置調整機能

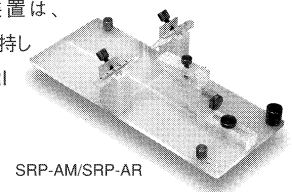
口鼻金具の位置調整はアリ溝機構を採用し、きわめて滑らかに動作します。口鼻金具を引っ張る時の微細な感触が手に伝わってくるので、誤って歯を折ってしまったり、外れてしまう心配が少なくなります。



アリ溝機構

MRIに対応した頭部固定装置

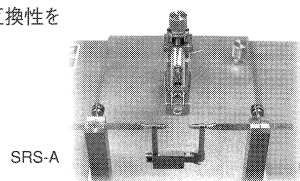
100%プラスチックの頭部固定装置は、ナリシゲのSRシリーズと高い互換性を維持しました。脳定位固定に加え、これからMRI測定も行いたいという方に最適です。



SRP-AM/SRP-AR

新生ラットからマウスまでの微細調整機構

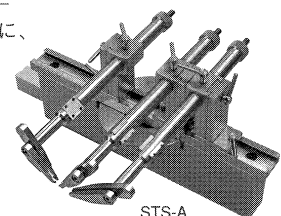
従来固定が難しかった新生ラットを安全に固定する、細部の微細な調整機構を装備した頭部固定装置を開発しました。SRシリーズとの高い互換性を維持しています。



SRS-A

デリケートな脊髄をソフトにクランプ

壊れやすく脆い脊髄を安全にクランプするために、手の力加減で微細な調整が可能。ソフトなクランプはマウスやラット新生児にも有効です。



STS-A

詳しくは当社担当までお問い合わせください。

インターネットホームページなら、他の各種製品の詳細も手にとるように判ります。 <http://www.narishige.co.jp>

株式会社 **成茂科学器械研究所**

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山4丁目27番9号 TEL.03-3308-8233 FAX.03-3308-2005

e-mail: sales@narishige.co.jp